純ちゃんのコーナー
（ロータリー３分間情報）
Part X

目　　次

1.『ＳＡＡについて』その１ …… 2
2.『ＳＡＡについて』その２ …… 3
3.『ＳＡＡについて』その３ …… 4
4.『ＳＡＡについて』その４ …… 5
5.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１ …… 6
6.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その２ …… 7
7.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その３ …… 8
8.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その４ …… 9
9.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その５ …… 10
10.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その６ …… 11
11.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その７ …… 12
12.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その８ …… 13
13.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その９ …… 14
14.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１０ …… 15
15.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１１ …… 16
16.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１２ …… 17
17.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１３ …… 18
18.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１４ …… 19
19.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１５ …… 20
20.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１６ …… 21
21.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１７ …… 22
22.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１８ …… 23
23.「四大奉仕の活性化」 …… 24
24.「職業奉仕の原点」 …… 32

序にかえて

十年一昔と謂いますが、竹中秀夫会員の発想で始まったこの３分間情報「純ちゃんのコーナー」も早くも十年の歳月を閲しました。そして、この十年の間に国際ロータリーの動向も、かなりおかしくなりました。殊に、規定審議会の多数決原理による衆愚政治は、はっきり言って救いがたい情況にあるとも言えます。それだけに私は、正しいロータリー情報を根気よく発信する必要を痛感しています。

私達は、国際ロータリーが如何に衰退しても、自分達のロータリークラブは自分達で守らなければなりません。これがクラブ自治権であります。正しいロータリー運動、ロータリーの本来あるべき姿を守ることは、ロータリアン一人一人に課せられた義務であります。何故ならば、ロータリーというものは、将に２０世紀初頭の先輩ロータリアン達が開発してきた素晴らしい智慧の結晶であり、先輩ロータリアンからの預かりものであります。したがって、この「素晴らしきもの・ロータリー」を現在に生きる私達がしっかりと受け継ぎ、未来のロータリーへ譲り渡す義務があります。

現在、国際ロータリーが提唱しているＣＬＰその他様々なルールの問題は、将に現象の問題に過ぎません。したがって、現象の問題に一喜一憂することは愚かなことであります。私達ロータリアンは、常に現象に惑わされず、物事の本質を見抜く力を失ってはならないのであります。

ロータリーは本来如何にあるべきか、というロータリーの本質（核）にあるものをしっかり守らなければなりません。

例えば、２００１年の規定審議会で廃止になった一業一会員制の原則についても、これは、必ず一業種から５人を採らねばならぬという問題ではありません。一業種から何人採るかはクラブ自身が決めることであって、将にこれは、クラブ自治権の問題であります。ＲＩが干渉すべき問題ではないのであります。

規則的例会出席の原則について緩和されたルールも、これを守らなければならぬというものではありません。守るか守らないかは、個々のロータリアンの倫理の問題、思想・良心の自由の問題であります。したがって、個人として昔の厳しいルールを自らに科すということも自由であり、そのようなロータリアンが居てもよいのであります。因みに、私は出席免除会員などには金輪際なる気はありません。生涯、正会員であり続けたいと思っています。

最後に、この一年間、私の拙い話を辛抱して聴いて下さったクラブの皆さん方の友情と寛容に心から感謝を申し上げますと共に、このパンフレット発刊に御尽力を賜りました竹中秀夫会員、山村幸夫会員はじめクラブ事務局の皆様に心からなる感謝を捧げてペンを擱きます。有り難うございました。

２０１１年９月２２日　　深　川　純　一

1.『ＳＡＡについて』その１

元来、クラブという組織の管理原則を原理的に割るときは三つの尺度を立てるのであります。これは会社や国家の組織を考える場合も同じでありまして、このように原理の大きな柱を持って三つに割るという躾を何時も持つべきであります。

即ち、第１に審議系列であります。これは原則を立てるところであります。国家で謂えば国会に当たります。この審議系列は自治権のある団体には必ずあります。クラブではこの機関を理事会と謂います。標準クラブ定款第９条第１節『このクラブの管理主体はこれを理事会とする』というのがクラブ管理の大黒柱的な規定であります。

第２に執行系列であります。理事会が決めた原則は、執行しなければなりません。執行の中心人物をクラブ幹事と謂います。この他に会長、会計、ＳＡＡがあります。これら執行系列の問題は、クラブの役員の役割分担の問題であります。

第３に、審査系列であります。これは、色々な争い事が起こった時に、争いに最終的に決着をつける機能であり、総会がこれに当たります。

さて、そこでＳＡＡというのはSergeant At Armsの略語でありまして、ロータリーの組織管理上は執行系列に属します。ＳＡＡは、既に１９０６年のシカゴクラブに正式な職制として登場しています。当時は、ポール・ハリス、Max Walf、Charles A. Newtonの３人が組織管理の原則を作っていましたので、ＳＡＡもこの３人の何らかのアイディアの交換の中から生まれたものと思われるのであります。

ＳＡＡは、会場監督と訳されていますが、これは元来、中世イギリスの宮廷における官職の一つでありまして、当時この役職は宮内大臣権限をもっていましたから、中世の宮廷における最高の権力者の一人でありました。したがって、ＳＡＡは、宮廷内の会議、宴会等が計画され実施される時に、その会議の目的を遂げるがために会議の秩序を維持する最高の責任者でありました。

そこで、ロータリーにおいても、例会や会議や宴会等は、特定の時に、特定の場所に、特定の人達が集まりますが、それぞれ皆、主体性を尊重された一国一城の主であります。しかも生身の人間でありますから、例会の途中で何が起こるか判りません。したがって、ＳＡＡは、そのような突発的な事態に速やかに対応しなければなりませんから、審議系列である理事会に席を持って、プログラムを企画立案する場に居ることは望ましくないのであります。何故かというと、理事会で予断を持っていると執行機関としては動きづらいことがあるのであります。したがって、ＳＡＡは、原理的には、理事を兼ねてはならないのでありまして、ある意味では、ＳＡＡは、即戦即決の単独決議機関なのであります。標準クラブ定款第９条第４節によれば、『ＳＡＡは、細則の定めるところに従って、その全員または一部が理事会のメンバーであってもよいし、そうでなくてもよい』と規定しており、職務上の理事であるか否かはクラブ理事会の決するところによるということになっています。しかし、原理論からすると、ＳＡＡは、理事会に席を持ってはならないのであります。

要するに、ＳＡＡは執行機関たる性格を貫くべきであります。幹事が職務上の理事であるのとは任務の性質が違うのであります。

2.『ＳＡＡについて』その２

前回は、ＳＡＡは、標準クラブ定款上は、理事会に席を持っても、持たなくてもよい、詰まり職務上の理事であるか否かはクラブ理事会の決するところによるということになっているが、原理論からすると、ＳＡＡは、理事会に席を持ってはならないと申しました。何故ならば、ＳＡＡは、執行機関たる性格を貫くべきだからであります。

ＳＡＡは、その責任が重く、その地位高きが故に、理事会の決定に参加している暇はないのでありまして、自分が予備的に独断で決定することができるのであります。

例えば、第１に、ＳＡＡは、例会の時間配分について監督する権限があります。会長の挨拶が長引いた場合、会長に発言中止を命令できるのはＳＡＡだけであります。

第２に、元来、ＳＡＡには例会中の途中退席・途中入場を禁止する権限が与えられていたのであります。即ち、病気その他特殊の事情によって途中退席する人は、ＳＡＡの許可を得なければなりませんでした。途中退席・途中入場にＳＡＡの許可を求めるのが紳士のマナーに叶うからであります。

次に、ＳＡＡについては、標準クラブ定款第９条第４節に職務上の理事に関する規定がありますが、この規定は、ヨーロッパ大陸法と英米法とでは原則の立て方が全く異なるのであります。即ち、大陸法では、職務上の理事というものは一旦理事会に席を持てばその限りでは理事会メンバーでありますから、理事会で意見を述べ、決議権を行使できるのであります。日本の法体系はこの大陸法であります。

ところが、英米法では、職務上の理事は職務によって理事会に居るだけでありますから（本来、ＳＡＡは執行機関であり審議機関ではありませんから）、理事会で意見を述べることは出来るが決議権は行使してはならないことになっているのであります。

したがって、原理的には、執行権と審議権とを峻別する英米法の方が合理的なように思われます。しかし、理事会に席を持って意見は述べるが、決議権は行使できない、しかし理事である、というのは、頭の整理からしますと出来の悪い処理の仕方であります。頭の整理からしますと、大陸法の方がすっきりしているのであります。即ち、職務上の理事は、一旦理事会のメンバーになった以上は、理事と同一の権利を有し義務を負う。したがって、決議権も行使出来る、という方が頭の整理にはよいのであります。

実は、この問題は、どちらの法制度がよいかという問題ではなくて、この種類の事態を処理するために考えられる二つの方法に過ぎないのでありまして、二つの可能性が並び立つと考えればよいのであります。

そこで、実利的には英米法（ロータリーの立場）の方がよいと考えられます。即ち、ＳＡＡは執行機関であり、理事会は審議機関の中心でありますから、審議機関である理事会で原則を定立するときは、執行機関であるＳＡＡは、一歩下がって客観的に理事会の原則の定立を見守るのであります。

そして、理事会が原則を定立した以上は、ＳＡＡは、理事会が決めた原則を（これは自分が決めた原則ではないのだから誰に憚ることもなく）専ら執行することに専念することになるのであります。この方がＳＡＡが動きやすいのであります。

3.『ＳＡＡについて』その３

前回は、ＳＡＡの「職務上の理事」の規定の解釈について、英米法と大陸法の考え方があることをお話し申し上げましたが、ではこの規定を具体的なクラブ運営についてどのように理解するべきかという問題があります。

例えば、１８８３年に創立されたイギリス上流社会の貴婦人の社交クラブ・アレクサンドリアに、イギリスの皇太子が途中入場しようとしたところ、ＳＡＡが、『只今、例会中でございます』と言って断固として入場を拒否した例があります。これは、クラブというものは、途中入場・途中退席によって会議の雰囲気が乱されることを極度に嫌うからであります。

ただ、最近は、例会出席の６０％ルールを誤解して、例会時間の６０％在席すれば、途中退席する権利があるなどと考える人が多いようでありますが、これは大変な誤解でありまして、６０％ルールは、あくまでも病気その他の特殊の事情のある人が途中退席したときに出席と認められるための最低の条件にすぎないのでありまして、途中退席の権利を認めたものではありません。

本来、ロータリークラブは、社交クラブでありますから、クラブに出るか出ないかは、会員の自由であります。そうだとすれば途中退席も自由な筈であります。したがって、もし会長が例会場に鍵をかけて皆が退席できないようにすると、刑法上は不法監禁罪になります。

ところが、ＳＡＡが鍵をかけた場合は不法監禁罪にならないのであります。何故かというと、刑法第３５条に『正当な業務による行為はこれを罰せず』と規定されていてＳＡＡが、鍵をかけることは、現場の秩序を維持するための正当な業務行為であると認められるからであります。これはＳＡＡだけに認められた権限なのであります。

このようにＳＡＡの職務は大変重要でありますから、ＳＡＡには、元会長、元幹事等のロータリー経験の深い人が就任するのが通例であります。

要するに、ＳＡＡの地位は高いと言うことを認識しなければなりません。したがって、ＳＡＡの職責の重要性を認識しないとＳＡＡの数が不足します。

一般的に言って、例会の秩序維持というＳＡＡの職責の重要性からすると、ＳＡＡはクラブの会員総数の１０％プラスアルファーが必要であります。

これはガバナーの指導と助言事項であり、例えば、５０人のクラブであれば、６～７名のＳＡＡが必要であります。例会場の各テーブルに一人ずつ副ＳＡＡを配置します。そして、副ＳＡＡの一人か二人は会長経験者であることが望ましいのであります。

ロータリー経験の深い人の意見を背後にして会員と対応するので、クラブの現場の処置が非常にうまく行くのであります。私がガバナーの時の伊丹クラブでは、６０名の会員に対してＳＡＡの数が１２名でありました。これも素晴らしい一つの考え方であります。

4.『ＳＡＡについて』その４

前回は、例会の秩序維持がＳＡＡの最重要な職責であることを話しました。私の知っている限りでは、鹿児島の或るクラブは最古参のパストガバナーが正ＳＡＡを務めておられました。これほどＳＡＡという職務は、クラブにとって重要であることを認識すべきであります。

以上を要するに、ロータリーの世界は、ロータリアンがどのような役職を務めようとも、ロータリアンの上にロータリアンを作らず、ロータリアンの下にロータリアンを作ってはならないのであります。それは、ロータリーが果たさなければならない役割の配分でありまして、些かなりとも、縦社会の上下の関係で考えてはならないのであります。このような万人平等・対等の人間構造がロータリーという組織体の論理なのであります。

そして、自分の出番の時に、その持ち場で最高絶対の権限を行使することによって、生き生きとした例会を作ることが出来るのであります。したがって、もし、クラブの現場が死んでいるとすれば、それはＳＡＡの責任であります。もし、クラブの管理がうまく行かないとすれば、それはクラブ幹事の責任であります。そしてもし、ロータリーの理論が行きわたらないとすれば、それは、クラブ会長の責任であります。

以上がＳＡＡについての原理的な話であります。そこで、最後に実践的な話を少し致します。前回、イギリスの社交クラブ・アレクサンドリアの例を挙げて、クラブというものが不意の闖入者によって例会の雰囲気が乱されることを極度に嫌うものであることを話しましたが、実は、このような例会の秩序を乱すものは、途中入場者や途中退場者に限りません。例会中の私語も例会の秩序を乱す最たるものなのであります。これは、喋っている本人としては、ヒソヒソと話しているつもりでありますが、皆が静かにしているだけに実によく聞こえるのであります。伊丹クラブのこの会場も声がよく透ります。殊にヴェテラン会員が私語をすると他の会員に示しがつきません。

そこで、このような事態にＳＡＡとしては如何に対処するべきか。通常は、例会の数カ所に配置された副ＳＡＡが間髪を入れず直ちに対応しなければなりませんが、その方法はどのようにするべきか。このことについて私達の先輩達は色々と智恵を絞っています。例えば、鈴を鳴らす方法があります。伊丹クラブにもその鈴がある筈であります。昔、尼崎北クラブの三宅博さんが贈って下さいました。ただ、鈴は、例会に響き渡るから良くないという場合は、「私語は皆さんのご迷惑になりますからお慎みください。ＳＡＡ」と書いたメモを予め用意しておいて誰にも判らないようにソッと渡すのもよいかと思います。このようにすれば皆で気持ちの良い例会が過ごせると思うのであります。例会は人生の道場であることを肝に銘ずべきであります。

5.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１

世界社会奉仕という概念がロータリーの世界に現れたのは、今からほぼ５０年ばかり前の１９６２年でありました。それは、戦争という国家間の利害の対立の中で個人の善意をもって解決すべき奉仕の実践である国際奉仕のほかに、第二次世界大戦後、国家間の利害の対立を越えて戦争では決着のつかない新しい問題が出て来ました。所謂、南北問題であります。ロータリーは、この問題に対するロータリアン個人の善意の働きかけの分野を１９６２年から世界社会奉仕ＷＣＳと呼んでいるのであります。

したがって、この世界社会奉仕という概念は、国際奉仕とは必ずしも原理的には共通の基盤を持たないのであります。原理的に見ますと、世界社会奉仕ＷＣＳは、国際奉仕というよりは、むしろ社会奉仕の範疇に属するものなのであります。

さて、今、世界が激しく変動していることはご承知のとおりであります。私達は、既に日本という一国だけでは生活出来ないことを実感としてもっています。そこで、先ず、第２次世界大戦後、現在に至る状況を簡単に顧みますと、戦後は、ＧＡＴＴ体制によって、アメリカを中心とした経済体制が世界中である種のパターンを占め、アメリカの世界的責任という形で進められてきたのであります。即ち、先進工業国が世界の責任を持っている社会でありました。

ところが、１９７０年以降，アメリカとソ連のイニシアティヴが失われた時に、第３世界からの発言が自然に強くなってきました。

それは、第３世界の国々が同じように経済的な権利を主張するようになったとき、今までのように特定の国だけが利益を得るのではなく、開発途上国も同様に経済的なシェアーを受けなければならないという宣言をして、世界もこれに同調しなければならない動きになったのであります。そこで１９７３年、アルジェリアで非同盟諸国首脳者会議が開かれて、二つの宣言がなされました。

先ず政治宣言がその一つ。これは、超大国の取引の中で世界の平和があるのではなく、一つ一つの本当に平和を願った国々が勝ち取ったものこそ本当の世界の平和である、と宣言したのであります。これは、やがて１９７５年、ヴェトナム戦争として現れました。

次に経済宣言がその一つ。これは、自分の国から出る資源は、自分の国のものであり、したがって、その値段は自分で付けるという宣言であります。このことから世界の経済秩序が変わったことは周知の事実であります。１９７４年に日本も最初の石油ショックをうけました。

以上のような、１９７３年以降の世界の激動の中で、一方で One world problem 即ち一つの世界の問題という考え方が世界中に浸透しました。

これは、人口、食料、公害、平和等の問題は、全世界の問題であるというのであり、この一つの世界の問題を解決しようという声が第３世界から起こったのであります。したがって、昔は力で抑えることの出来た国連の舞台では、大問題であったわけであります。

6.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その２

前回は、１９７３年以降の世界の激動の中で、一方では、One world problem 即ち、一つの世界の問題という考え方が世界中に浸透して行きました。

これは、ロシアの核廃棄問題やタンカーの重油流出事故のように公害、平和、人口、食料等の問題は、自分の国だけの問題ではなく、全世界の問題であるというのであります。

そこで、この一つの世界の問題を解決しようという声が第３世界から起こって来たために、昔は力で抑えることの出来た国連の舞台が大きく変わったということを申し上げました。

このような世界の動きの中で国際社会を動かす主体もまた変わりました。従来は、国家や多国籍企業でありましたが、その後、そのほかに、民衆乃至ＮＧＯ（Nongovernment Organization）が大きな役割を果たすことになってきたわけであります。ＮＧＯというのは、例えば、赤十字、世界宗教連盟、グリーンピース、ＹＭＣＡ、ロータリー等であります。

アメリカがヴェトナム戦争で信頼を失い、ソヴィエトがチェコ侵略で信頼を失ったとき、第３世界からの発言が自然に強くなり、その結果、国際関係を形成していく主体は、最早、国家ではなくて民衆である、と考えられるようになったのであります。例えば、１９９０年代のソヴィエト連邦の主権の崩壊は、民衆の力に負うところが大きいのであります。

このようにして、一つの世界の問題 One world problem の考え方は、言い換えますと、『世界の問題を考えるとき、一人一人の人間を大切に考えていかなければ世界の問題は考えられない』という考え方であります。

実は、ロータリーは、１９７０年代におけるこのような状況 One world problem 一つの世界の問題を既に１９６０年代にいち早く予測して、その対応を自覚していたのであります。

それは、１９６０年以降、国家の対立を前提としないグローバルな世界社会というものの見方から来る実践の分野があるのではないか、という自覚が出てきたのであります。即ち、国際社会から世界社会へという考え方の発展であります。

その前駆的症状として、１９６２年度の国際ロータリー会長ニティッシュ・ラハリー（Nitish C.Laharry）の Oneness of the world の提唱、即ち、『世界中の何処かの片隅に一人でも不幸な人が居る限り、我々ロータリアンは永久に幸せになることが出来ない。

心の中に火を燃やそう！Kindle the spark within！』という有名なターゲットによる世界社会奉仕の自覚に始まり、１９６３年度の国際ロータリー会長カール・ミラー（Carl P,Miller）の Matched district 地区提携というプログラムを経て、１９６６年度の国際ロータリー会長リチャード・エヴァンス（Richard.L.Evans）の時代に世界社会奉仕ＷＣＳ（World Community Service）というプログラムを実践するに至るのであります。そこで、一体、世界社会奉仕という考え方は、どのようにして出てきたのかという話に入ることになります。

7.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その３

前回に引き続き、世界社会奉仕 World Community Service（ＷＣＳ）という考え方は、一体どのようにして出てきたのか、という話に入ります。

先ず１９５１年、第３次世界大戦の緊張が高まるに及んで国際ロータリー理事会は、『世界平和の樹立を目的とする国際奉仕の実践の８原則』というものを宣言しました。これは、誠に素晴らしい宣言でありました。

しかし、この文章は大変難しかったので、国際ロータリーは、１９５３年にこの『８原則』を事例をもって判りやすく解説して『平和への七つの道』Seven paths to Peace を発刊したのであります。

この『平和への七つの道』をロータリーの原理に則って解説しますと、これはクラブ奉仕論の投影であることが解るのであります。ロータリーの奉仕の基本類型はクラブ奉仕でありますから、クラブ奉仕の原理パターンが判れば、その外部的投影が職業奉仕であり、社会奉仕であり、国際奉仕であることが解るのであります。即ち、第１．『ロータリアンは、自分の所属する国の固有の伝統に誇りを持つべきこと』即ち、日本人は、日本固有の文化伝統（社会的伝統、宗教的伝統、経済的伝統等）に誇りを持たなければなりません。

私達は、先祖代々、天照大神の時代からリレーのように精神的な法脈というものを伝えてきました。そして、各世代に亘って、皆真面目に生きてきたのであります。したがって、私達は現在の時点に立って、私達の先輩達が積み重ねてきた日本固有の文化の伝統の尊さというものを誇りを持って理解する努力をしなければ、国際奉仕というものは考えられません。したがって、外国かぶれは厳に慎むべきであります。

このことの一例として、１９３０年の日本の地区大会において１９１４年度の国際ロータリー連合会会長 Frank L.Mulholland が、ロータリーソングも日本語で唄うべきだと諭したのは傾聴すべき見解であります。『自国の諸々の伝統に誇りを持つべきこと』日本人は日本の文化伝統が世界一だと思うべし。アメリカ人は、アメリカの文化伝統が世界一だと思うべし。と謂うことは詰まり、各国の国民は各々自国の伝統が世界一だと思うべしということであります。そうだとすると、国家の数だけ最高の文化伝統があることになります。ところが、自国の伝統が最高だと思えば他国に対する優越感に結びつきます。

そこで次に、第２．ロータリーは、『自国の伝統に誇りを持つが故に、他国民の伝統に対して優越感を持つべからず』というのであります。

これをクラブ奉仕の原理に当て嵌めますと、ロータリアンは、職業分類によって示されている自分の職業の伝統に誇りを持つべし、となります。したがって、ロータリアンの数だけ最高の伝統があることになります。そこで、自分の職業の伝統に誇りを持つが故に、他の職業人の伝統に対して優越感をもってはならない、ということになるのであります。ここから出てくる次の原則は次号に申し述べます。

8.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その４

前回に引き続いて『平和への七つの道』をロータリーの原理に則って解説します。前回の第１．第２．の原則から出てくることが、第３．『他国民の伝統に対して、謙虚に頭を垂れて学ぶ姿勢を持つべきこと』と謂うのであります。ロータリアンは、クラブ例会では謙虚に頭を垂れて何かを学び、そして例会を去る、ということであります。

クラブ奉仕の原理としては以上で終わるわけでありますが、最後に、これは老婆心のこととして、第４．『国際社会の中で個人奉仕で実践するべきこと』と謂うのであります。しかし、国際社会は、大海原のように広いので、正に絶望的であります。にも拘わらず個人奉仕で実践しなさいというのであります。

即ち、ロータリーで個人奉仕ということは、因縁の熟したものから実践するべきことを意味するのであります。因縁が熟さないのに無理をして、背伸びをして実践しても何の効果もない、因縁の熟したものから個人奉仕で実践しなさいよということであります。最近は、金を集めては、団体奉仕で実践したがる傾向があります。

以上が『平和への七つの道』のあらましであります。何はともあれ国際ロータリー理事会は、第３次世界大戦が起こりそうな緊張が高まるに及んで、その予防のために誠によい原則の提示をしたのであります。

しかし、全世界のロータリアン達は、その意図するところを正しく理解することが出来ませんでした。

では、そのままどうして決着がついたのかと言いますと、この緊張は、ケネディとフルシチョフの米ソ両巨頭が「イデオロギーから発生する問題は、他人の存在がなくなるまで自分の存在を相手に押しつけない限り、戦争にはならない」という共存共栄の原理を自覚したことによって決着がついたのであります。

そこで、このような大国の指導者の認識によって、第３次世界大戦の勃発というものは、今後は小さな鍔迫り合いはあっても、世界大戦にはならないと考えられるようになりました。

要するに、これからは地球を破滅に導くような世界大戦は起こらないのではないか、という状況になりましたが、そうなると国際奉仕の要請というものは、必ずしも戦争の勃発を前提とするものではないけれども、戦争勃発の可能性が遠のけば、国際奉仕の実践の危機感というものは、多少薄れてくるのではないか、と思われるようになったのであります。それが１９６０年位のことであります。

ところが、ここに、従来とは全く別の重大問題が起こって来ました。それが所謂「南北問題」であります。

具体的にそれは一体どういうことなのかということについては、長くなりますので次号以下に順次申し述べたいと思います。

9.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その５

前回は、冷戦の終結とは全く別の重大問題即ち「南北問題」が発生したことを申しました。では、具体的にそれは一体どういうことなのか。現在の日本は、人類の歴史上、昔の如何なる王侯貴族にも勝る生活をしています。にも拘わらず、私達にはなお不平不満があり、社会福祉が充実していないとか政治が悪いなどと全く反省せずに暮らしています。

しかし、世界を広く見渡しますと、私達の想像を絶するほどの惨めな生活をしている人達が沢山います。例えば、私達が豊かな生活をしているこの瞬間にも、アフリカその他の発展途上国では、５歳以下の子供が１時間に５００人位も餓死し、毎日１３００人以上がエイズで死んでいると謂われています。また、アフリカでは、毎年８０００万人の人が食べるものもなく飢えて死んでいるとも謂われています。

このように、地球の一方には豊かな民族が居る半面、他方には生きるか死ぬかの瀬戸際にいる極貧の民族が居ます。この極貧の民族は、全世界の人口の８割に達しています。これが現在の世界の状況であります。

この状況を放置しておいてよいのか、まさに重大問題であります。

そこで、少し古い話になりますが、今から約５０年位前にブラジルの国際経済学者がこの問題について警告を発しました。

それは、『地球上の富の８０％は、僅か２０％の先進国の富める民族の独占するところとなっている。これに反し、８０％の開発途上国の貧しい民族には、残りの富の僅か２０％しか与えられていない。少数の民族が地球上の富を殆ど独占し、他の民族は赤貧洗うが如き生活を余儀なくされている。

更に問題は、開発途上国の人口の増加率は、目に余るものがある。したがって、事態がこのままに推移すれば、開発途上国の人口が急増して、これらの人達を生かすために先進国がどんなに食糧を増産しても２０年後には地球上に大飢饉がやってきて、先進国の繁栄を永続化することは出来なくなる』と謂うのであります。

果たしてこの警告通り、その２０年後にインドとアフリカに大飢饉が到来しました。

この対応策としてブラジルの国際経済学者は、『地球全体を一つの社会と考えて、先進国の国民が個人として自分の責任において開発途上国に行き、その国民に対して、人間の人間たる所以は、人と人との関係を強化すること、人と人との協力関係の尊さ、というものを教える、つまり自立心を育成して、しかも何物をも求めずに帰ってくる、即ち個人の Volunteer 活動乃至奉仕活動が必要である』と説いたのであります。

この話は、約５０年前の当時においては、国際感覚のないロータリアンや一般人には、甚だ奇異の目をもって見られていたのであります。

ところが、ロータリーは、世界的な組織でありますから、ブラジルの学者の提唱の７，８年前に既にこの問題を指摘していました。

10.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その６

前回は、ブラジルの学者が南北問題の対応策を提唱したと申しました。

ところが、ロータリーは、世界的な組織でありますから、ブラジルの経済学者の提唱の７，８年前に、既に『平和への七つの道』Seven paths to Peace の中に、南北問題に関して指摘した一章が出てくるのであります。

したがって、『平和への七つの道』というのは、実は、ロータリーが世界中の指導的な職業人を人間の善意によって結ぼうというグローバルな活動をしていますが、そのデータの中から後にブラジルの学者が提唱しようとするものを先取りする程の問題意識を持っていたということであり、これは私達ロータリアンの誇りとするところなのであります。

ところで、このブラジルの経済学者の話は、今から約５０年前には、非常に奇妙に聞こえるところがあります。何故かと言いますと、第１に、地球全体を一つの社会と考えるのでありますから風呂敷が大きすぎます。第２に、その対策として一人一人の先進国の人間が開発途上国に行って何かをするというのでありますから話の規模が小さすぎます。

したがって、これは奇妙奇天烈だというので、少なくとも効率を重んずる人達は、この考え方について行くことが出来なかったのであります。即ち、地球の問題や外国の問題は、元来、国家の仕事であって、国家は莫大な財力や武力も機動力も持っています。したがって、このような問題は、個人では何とも出来ない問題であるから国家が面倒を見るべきであると考えるのであります。

しかし、ブラジルの国際経済学者は、『国家では何ともならない、そこのところは既に計算済みである』と謂うのであります。

では、何故、国家では何ともならないのか。と言いますと、国が外国を援助するときには、国民の血税・税金をプールした公共財源を使いますから、国益に適うやり方で使わなければなりません。つまり、金を溝に捨てるような形で、損をするような形では、税金は絶対に使えないのであります。

したがって、例えば、開発途上国に２億ドルの借款を設定した場合でも、必ず利益が上がるようになっているのであります。

それは一体何故かと言いますと、借款を設定して相手国でダム工事や道路建設をする場合、その工事を請負うのは日本の建設会社でありますから、その会社が相手国の金即ち借款を設定した日本からの血税を全部もらって戻ってくることになります。そして、国はその会社から法人税を徴収するのであります。それから、海外における市場を確保することができます。

このような利益を計算しなければ、国は絶対に外国を援助すべきではないし、また、援助できる筋合いのものでもないのであります。つまり、国というものは、損をするような形で金を使うことは絶対にできません。したがって、国家では何ともならないのであります。

11.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その７

前回は、ブラジルの学者の南北問題の対応策について、国家は国益を考慮して金を使いますから国家では何ともならないと申しましたが、更に国の援助と言うものは、必ず紐付きであります。援助を受けた国はそれによって、かなりのものを失うことを覚悟しなければなりません。

その最たるものが、【ビアフラ戦争】であります。１９７０年頃、アフリカのビアフラで内乱が起こりました。反乱軍を援助しているのはソ連、政府を助けているのは、フランスとイギリス・アメリカであります。

ビアフラ人は、自分の国の内部のことでありますから、早く止めなければならないと思っても、金を出しているソ連やフランスの方がもっと頑張れと言って止めさせない。それで、最後まで戦って政府が倒れ、内乱は成功したのでありますが、大変な飢饉がやってきて３００万人が餓死したという事実があります。（フォーサイス著・“飢えと死の淵から”）

また、昔、西ドイツが未だシュミット首相の時代の古い話でありますが、首相が破産寸前のイタリアを救うために、返済の見込みのない２０億ドルの借款を与えようと議会に提案した時に、議会の猛反対に対してシュミット首相は、『イタリアの崩壊はヨーロッパ共同体の崩壊を意味する。ヨーロッパ共同体が崩壊すればドイツも危ない。したがって、ドイツが生き延びるためには、イタリアを救わねばならない』という論理をもって議会を説得したのであります。

やはり、他人を生かしてこそ自分の生きる道もある。共存共栄というのは、かなり厳しいところがあるのでありまして、このことも心に留めておかなければならないと思います。相手の身になって考えるということが非常に厳しいものであること、そして、その事がこれからの時代を生き抜く道でもあると思うのであります。

しかし、その西ドイツの援助の結果、イタリアはどうなったか。

イタリアの北部にガルダ湖という湖があり、そのあたりは、イタリアでも最高級の別荘地帯でありますが、その別荘地帯は、全て西ドイツの実業家の所有するところとなったのであります。

これを見ても判りますように、国の援助というものは必ず紐付きであり、援助を受けた国は、それによってかなりの物を失うことになります。

これは一体何を意味するのか。ブラジルの国際経済学者が指摘するように、国の援助と言うものは、貧富の格差の存在を前提とする南北問題では有害無益であるということであります。

したがって、先進国の国民が自分の責任において、開発途上国に行って自分の専門の小さな分野でよいから、彼等とスクラムを組んで、彼らの自立心を育てる、そして効果が上がれば、何物も求めずに引き上げてくるというボランティア活動が必要となるのであります。

実は、このブラジルの学者の考え方こそは、ロータリーの真髄に関する問題なのであります。

12.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その８

前回は、ブラジルの国際経済学者が説くように、先進国の国民が自分の責任において開発途上国に行き、自分の専門分野で彼等とスクラムを組んで彼らの自立心を育て、そして何物も求めずに引き上げてくるというボランティア活動が必要であると申し上げました。

実は、このブラジルの学者の考え方こそは、ロータリーの真髄に関する問題なのであります。ロータリーは、どんなに地球が大きくても『人類社会の基本は個人である』と考えます。これは大事な点であります。

人間社会の本質は一体何か。それは、地球の中心は、結局は、人間一人ひとりの自覚であります。今は、民衆が世界を動かすように、一人一人の人間の自覚が基本であります。ひたすら自分の内なるパーソナリティを高めていって、他人にもそれを慫慂します。このように一人ひとりの規模を大きくして、それらの心の通い合いをもって社会改良を目指すのであります。国の援助では何ともならないのであります。

この辺のところは、労働組合とかストライキとかいう団体の力を行使して社会を揺さぶろうなどという現象に惑わさますと、一人では何ともならないから皆で団結しよう、ということになります。しかし、些かなりとも自分というものについて自信のある人間は団結しません。

例えば、動物の社会を見ても、弱い鹿や縞馬は群れて団体行動をしますが、強いライオンや虎は群れることはありません。ポール・ハリスは、ロータリーは団結しないところに美徳があると謂い切っています。

要するに、一人々々の自覚が基本であります。只管、自分の内なるパーソナリティを高めて行き、他人にもそれを高めることを慫慂します。そして、その一人一人の規模を大きくして、その大きくしたものの心の通い合いというか、そのエネルギーをもって社会を改良しようというのであります。

実は、ブラジルの経済学者の提唱を純理論として図式化してみますと、個人奉仕の実践にピッタリ合うのであります。この広い地球社会の中で団体でなく個人で奉仕をしようというのであります。即ち、

第１に、地球を一つの地域社会と考えて、これをロータリーのテリトリーと考えるのであります。

したがって、世界社会奉仕と謂うものは、国際奉仕と謂うよりは寧ろ社会奉仕であります。

第２に、地球を一つの地域社会と考えるときに、そこに貧富の格差から来る社会のニーズ Community needs というものが存在します。

第３に、その Community needs に対して個人奉仕をもってその needs を解決しようというのであります。しかも、これは育てる奉仕であります。

そこで、決議２３－３４号第６項によると、先ず社会のニーズを調べます。そして、そのニーズに対する適切な奉仕として、個人奉仕を実践するのであります。そこで、これは将にロータリアンが取り組まなければならない問題だということになるのであります。

13.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その９

前回は、ブラジルの経済学者の提唱を純理論として図式化しますと、広い地球社会の中で団体でなく個人で奉仕をしようというのでありますから、ロータリーの個人奉仕の実践にピッタリ合います。そこでこれは将にロータリアンが取り組まなければならない問題であると申しました。そこで、国際ロータリーはこれについて色々と準備作業を始めました。国際ロータリーが動くときには、少しずつ動くのが原則であります。

先ず、１９６３年、ＲＩ会長カール・ミラーの時、地区の提携 Matched District から始まりました。これは、全世界のロータリークラブがそれぞれの地域状況というものをよく心得て居ますから、ＲＩが仲人となって、そのようなクラブとクラブとがお互いに情報交換をするところから、段々と視野を広げていこう、という作業を組み始めたのであります。

そして、１９６６年、リチャード・エヴァンス会長の時に、世界社会奉仕ＷＣＳという実践類型を確立するに到ったのであります。

地球と呼ばれる一つの社会に対して奉仕の実践を行う、ということであります。したがって、これは国際奉仕と謂うよりは、むしろ原理的には社会奉仕であります。そこで、ＲＩは何をしたかと謂いますと、実験をしようということになりました。

ところで、国際ロータリーレベルにおける役員というのは、会長、理事及び現ガバナーでありますが、現ガバナーは、地区管理で忙しいので予備役のパストガバナーを使おうということになりました。

そこで、数名のパストガバナーが選ばれ、これらの人達がＲＩの委嘱を受けて、南北問題を解決するために地球上のそれぞれの地域に派遣されたのであります。

日本からは、姫路の斉木亀次郎パストガバナーが、インドの或る地域へ行かれて、中小企業の経営相談をされました。斎木さんは、世界社会奉仕の実験に参加した只一人の日本人ロータリアンであります。

斉木さんが筆を執るときは、日本人ロータリアンの中で、米山梅吉氏、井坂孝氏を除けば、これ位美しい文章を書いた人はいない、といわれる位、文章のスタイルが美しい人でありました。

それから、斉木さんの思想、信条から申しますと、彼は敬虔な仏教徒でありました。

したがって、仏教の教理をもってロータリーの奉仕哲学を説いたという、大変見事なロータリーの解説をした人であります。

斉木さんは、この時の経験をもとにして【ミスターほてい】という本を大変美しい文章をもって書いておられます。但し、この本は、今日、殆ど手に入らないようであります。

斉木さんは、このほかにも幾つかの本を書かれましたが、その中でも【アホウ鳥よちよち歩く】という大変素晴らしい本を書いておられます。これは斉木さんがガバナー月信に毎月連載されたものを纏められたものであります。

14.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１０

前回は、斉木さんはじめ数人のパストガバナーがＲＩの委嘱を受けて世界社会奉仕の実験に参加されたことを申し上げました。

ところで、この実験では、或る人は南米のホンジュラスへ行って農業用灌漑技術を教えたり、或る人は初等教育を担当したりしました。

このようにして１年間の結果を集約したところ、ＲＩ理事会の期待にも拘わらず結果は明らかに失敗でありました。そこでＲＩ理事会は大変驚いて、当時ＲＩ理事会の下部組織としてあった世界社会奉仕委員会を廃止してしまったのであります。これは、実験が失敗に終わったので、残念ながら取り敢えず撤収しようということでありました。

では、何故失敗したのか。

第１に、それは、実験に参加した人達の心構えの問題もあったのではなかろうかとも思われるのであります。『我々は、功成り名遂げたロータリアンである。別に貴方達を助けなければならない因縁はないが、慈悲心によってここに来たのだ』という発想が私達の心の奥底にないかと謂えば、ないとは言い切れないのであります。これは、先進国の人達の悲しさでありまして、私達が、南北問題に取り組まなければならないときには必ず考えておかなければならない問題であります。このような発想が少しでもあれば開発途上国の人達は、一体どのように反応するかと言うと、開発途上国の人達にしてみれば、『何言ってるのよ。何時、自分達が貴方に慈悲心をもって此処に来てくれと頼んだか。慈悲心だか何だか知らないが、ああしろ、こうしろなど全く余計なお世話だ。帰ってくれないか。』ということになります。

人間というものは悲しいものでありまして、自分の内なる善意が必ずしも相手の心に伝わるかどうかは判らないのであります。

国際社会には、この問題がありますから相手と目の高さを同じにしなければなりません。

第２に、言葉の障害があります。したがって、こちらが善意で話したことを相手が悪意で受け取る場合があります。もっとも、このようなことは、同じ国の言葉でもあります。

第３に、風俗習慣、ものの考え方の相違もあります。原理社会と状況論理社会のように異民族社会の間では、誤解は付きものであります。

以上のような問題があって、慈悲心に名を借りたロータリアンの思い上がりがあると開発途上国の人達の反発を買うばかりであります。反発を買う原因は、上から下への恵む上下の奉仕だからであります。

ロータリーの奉仕は、上下の縦の奉仕ではなくて横の奉仕であります。これは、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕、全て同じであります。

世界社会奉仕にあっても、『私達は先進国の国民であるから汝ら承れ』という意識が少しでもあれば、奉仕というものは、永遠に実現されるものではありません。必ず、同じ対等の立場に立って、スクラムを組んで、『一緒にやろう』という意識が絶対に必要なのであります。

15.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１１

前回は、ＲＩが世界社会奉仕の実験をしたところ失敗であったこと、その原因が彼らと対等の立場に立たなかったことにあると申しました。これは、彼らの立場に立って、彼らがどんなに愚劣に見えても、彼らと同じ立場に立って一緒に行動しなければならないのであります。国際理解には、先ず人間の理解、詰まり思いやりの心が必要なのであります。

したがって、或る種の教育的手段を使って、開発途上国の人達に自立心というものを育てていく、そして、それが出来上がれば何ものも求めずに帰ってくる、というやり方が必要であったと思われるのであります。

ところが、パストガバナーの人達は、問題意識は高かったのでありますが、開発途上国に対する適切な方法を開発することが出来なかったがために、実験は失敗に終わったと思われるのであります。

このように、実験は失敗に終わったので、ＲＩは、One step back して、世界社会奉仕の純度を下げました。即ち、その純度の高さからすると、

１．地球を一つの地域社会だと考える。

そこに、

２．貧富の格差から来る community needs が存在する。

これに対して、

３．個人奉仕をもってボランティア活動をしよう。

というのでありますからこれは労務奉仕（個人奉仕）であります。

そこで、労務奉仕（個人奉仕）ということになりますと、金銭の投下による団体奉仕では世界社会奉仕の適切な実践にはなり得ない、ということを意味するわけであります。

しかし、個人奉仕で実験をしてみたところ失敗したので、ＲＩ理事会は、これからは団体奉仕、金銭奉仕で行こうということになったのであります。謂わば、個人奉仕、労務奉仕を本質とする本来の世界社会奉仕からその純度を下げたわけであります。

但し、ＲＩのライブラリー即ち、仲人機能を使おう、それが世界社会奉仕になる、という議論の整理をしたわけであります。

これが、１９６６年にエヴァンス会長が２度目の世界社会奉仕の提唱をしたときに新たに付け加えた第４番目の要素であります。即ち、

１．地球を一つの社会と考えるべきこと。

そこに、

２．貧富の格差から来る世界社会のニーズ World community needs がある。

３．これに対して、今度は個人奉仕ではなく、団体奉仕、金銭奉仕をもって、この World community needs を解決する必要性がある。

４．ただ、しかし、地球は広いのでＲＩがこの仲人になろう。

というのであり、これがエヴァンス会長が付け加えた４番目の要素であります。

即ち、ＲＩは、ライブラリーというものを持って、community needs を明らかにするクラブと、これに対して community service を提供するクラブとの間に立って、これの仲人をしようというのであります。

ただしかし、この考え方自体はよいのでありますが、果たしてＲＩにはこれが出来るだろうかという問題があります。

16.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１２

前回は、貧富の格差から来る世界社会のニーズに対してＲＩがライブラリーを持って、needsを提示するクラブとserviceを提供するクラブとの間に立って、これの仲人をしようというのでありますが、果たしてＲＩにはこれが出来るのかという問題があると申し上げました。その理由は、この種類の問題というのは、追跡調査が必要であります。したがって、兎に角仲人はしたのだから後のことは委せるというわけにはいきません。後のことについては、一体どのようなcommunity service が提供されて、どのような効果を挙げたのか。成功したのであれば、何故成功したのか。失敗したのであれば、何故失敗したのか。その原因の追究をしておかなければ無責任な一発勝負に終わってしまいます。

ＲＩは、元来ロータリークラブと同じように追跡調査が出来ない団体であります。

したがって、クラブの事業計画に取り入れられた社会奉仕については、出来るだけ単事業年度内、即ち１年以内に決着のつくものに限り、長期に亘って同じプログラムを取り組んではならない、ということになっているのであります。これは、元来、ロータリークラブには追跡能力がないことを示しているのであり、ＲＩも全く同じであります。したがって、ロータリーは、長期に亘るプログラムは個人奉仕で実践せよと言います。個人であれば、その人の執念のある限り追跡的に面倒をみることが出来るのであります。したがって、ロータリーの本質が個人奉仕にあるというのは、大変意味の深いところでありまして、団体奉仕では、一発勝負の線香花火的なことしか出来ないのであります。

したがって、ＲＩが仲人をするというエヴァンス会長の提案の最大の誤りは、追跡調査をしなければならない事業に対して、追跡調査の出来ないＲＩが仲人をしようとした点にあるのであります。仲人だけでは、何ともならないのであります。

ところが、ＲＩがライブラリーをもって仲人をしようというこの方法は、大きな欠点があります。何故かと言いますと、国際奉仕と世界社会奉仕という実践の類型の分け方が、貧富の格差是正を目的とする奉仕の実践活動では区別が出来なくなってしまうことであります。

例えば、フィリピンで水害のために米が足りなくなった時、或るロータリークラブが直接フィリピンのロータリークラブへ空輸しますと、これはＲＩのライブラリーを使っていませんから国際奉仕であります。

ところが、ＲＩのライブラリーを使って空輸しますと世界社会奉仕になります。しかし、送った米の量も米の受取人も同じであります。全く同じことをしていて、やり方によって奉仕の実践の呼び方が変わるのであります。このようにこの両者を区別することは出来ないのであります。

これは、結局、ＲＩの考え方の純度が下がったので、どちらでもよいような形になってしまったわけであります。もともと区別が出来なくなったのでありますから区別できる筈はないのであります。

17.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１３

前回は、国際奉仕と世界社会奉仕との区別について、ＲＩの考え方の純度が下がったので区別が出来なくなったということを申し上げました。

元来、世界社会奉仕は、個人奉仕という純度の高いものでありましたが、最初の実験に失敗した結果、個人奉仕から団体奉仕へと純度を下げたために国際奉仕と世界社会奉仕とが区別出来なくなったのであります。

この純度を下げた世界社会奉仕の日本での第１号は、【６６計画】というフィリピンの農村復興運動を援助しようというものでありまして、鹿児島のＲＩ３７０地区とフィリピンのＲＩ７１７，７１９，７２１地区が協力して、４地区内の９０００名のロータリアンが一人６６セントずつ金を出そうというもので、１９６６年の６月６日レイクプラシッドの国際大会で決定されたものであります。

ところで、世界社会奉仕の本来のものは個人奉仕でありますから、因縁が熟さなければ実践は出来ません。そして、私達にとっては未だ因縁が熟していないのであります。

したがって、開発途上国に行って個人奉仕で世界社会奉仕の実践をしようと思っても出来ないのであります。

しかし、出来ないことを恥ずかしいと思う必要はありません。全ての奉仕は何でも因縁の熟したものから実践すればよいのであります。

そこで、地球は広いので中には因縁の熟した人達もいます。例えば、オーストラリアのロータリアンが３ヶ月の有給休暇を利用して、パプアニューギニアに行ったところ、カソリックの神父さんが布教活動の一つとして、病院を建てて無料奉仕で現地人の医療救済をしておられました。

しかし、何もないところからボランティア活動をしていたので建物はボロボロでありました。そこで、そのロータリアンは、建築会社の社員でありましたので、一つ助けてやろうというので、３ヶ月の間に建物を修理して大変感謝されてオーストラリアに戻ってきたわけであります。

実はこのような種類の活動を国家的な活動にまで高めたのがＦＡＩＭ Fourth Avenue In Motion という運動になって発展するようになったわけであります。

これは、只単に、ロータリアンがこの種類の活動に金を出したというだけではなくて、ロータリアンが行なったこの種類の活動に対して、国民がその価値を認めて、活動資金をここにドンドンプールしてくるようになったのであります。そこで、或るロータリアンは、『俺はボルネオへ行こう』とか『フィリピンで中小企業を育てることを助けよう』とかいう具合に色々なことするようになったのが、このＦＡＩＭであります。

このＦＡＩＭは、１９６４年、ケイスホッパーパストガバナーの提唱したものでありますが、１９７７年、国際ロータリー理事会が正式プロジェクトとして承認しました。その時に、１９６５年のＩＰＡＣ（International Project Advisory Committee 開発途上国援助事業）も同時に承認したのであります。

18.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１４

前回は、先進国の実業家達がＦＡＩＭ Fourth Avenue In Motionという誠に立派なことをしていると申し上げました。そこで、やがて日本のロータリアンにも因縁が熟することは間違いないと思われるのであります。したがって、日本のロータリアンにとって世界社会奉仕というものは、近い将来の夢の実現の世界なのであります。

ただ、私達日本のロータリアンにとっては、未だ因縁は熟していませんが、この因縁の熟する機会は、突如としてやってくるかも知れないのでありまして、私達は心の準備をしてそれを待つだけの腹構えがなければならないと思うのであります。

以上が、世界社会奉仕についての原理の概要であります。

ところで、奉仕の実践の問題として世界社会奉仕の実現のための最大の課題は、南北問題の解決であります。そのためにはボランティア活動が必要であることは明らかであり、現実に献身している人達も居ます。

例えば、神戸大学の岩村昇博士は、開発途上国の人達に自立心を育てるためにネパールで２０年間にわたり結核の予防に献身されました。先生はロータリアンではありませんが、バングラディッシュに戦争が始まった時、難民が出たという話を聞いてネパールの草の根の人達と共にバングラディッシュへ行って難民のための給食センターを作りました。

ところが、世界中から援助を貰いすぎたため、上は大臣から下は給仕に至るまで、貰い得の乞食根性になってしまった結果、評判が悪くなり、援助がストップされました。

その結果どうなったか。給食センターが出来た村の子供達は、ドラム缶の粉ミルクが来なくなったので飢えて死んで行ったのであります。

ところが、給食センターが出来なかった鄙びた村は、元々自給自足でありましたので自立心によって生き延びることが出来たのであります。

また、カンボジアの難民キャンプの後をどうするかという国連の会議で、カンボジアの母親が言いました。『確かに緊急の時には世界中からの援助物資が有り難かった。給食センターへ空きっ腹で行きさえすれば、あてがい扶持がいただけたし、裸で震えている体を持っていけば、日本から来た古着をお仕着せしていただいた。しかし、緊急時が去った今、それだけでは駄目だということが判った。

何故かと言うと、家の娘は、もう７歳にもなったのに台所の手伝いが全然出来ません。カンボジアの村が平和であった頃には、母親の台所姿を後ろから見て、７歳にもなれば、手伝いが出来るのが普通でした。

今、平和になったカンボジアの村へ帰って、台所を作り、村を起こそうという時に、母親から娘に伝えなければならない生活の知恵の鎖がたちきれてしまっている。今から必要なのは、自分の人生を自分で作っていくという自立心です』と。このように、南北問題の解決には金銭奉仕・与える奉仕では全く効果がないのであります。

19.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１５

前回は、南北問題の解決には金銭奉仕・与える奉仕では全く効果がないということを申し上げました。したがって、開発途上国の人達が経済的に自立して行くためのまたボランティア活動がどうしても必要になります。

そこで、ネパールの草の根の人達自身のボランティア活動によって、自分達を貧困から解放し、飢えから解放するという自立のボランティア活動が、ネパールの僅かな村で起こった例を紹介しておきます。

それは、櫻井さんという日本人女性のボランティアの栄養士が播いた種が芽生えたものでありました。それはどういうことかと言いますと、ネパールでは、折角ＢＣＧを打っても、体内に免疫を作る材料になるタンパク質が足りないために免疫が出来ず、結核に犯されてしまいます。しかも、ヒンドゥー教徒は牛肉、回教徒は豚肉が宗教上タブーであります。そこで、岩村先生は、ネパールで誰でも食べられる大豆のタンパク質を何とか採り入れたいと櫻井さんに頼んだのであります。

櫻井さんは、９ヶ月間雨が降らない乾燥地帯、味噌も豆腐も作れないところで、苦心の結果、きな粉の活用を思いついてくれたのであります。

ネパールには、トウモロコシを火で焙り石臼で挽くトウモロコシコガシという食習慣があり、これとよく似た大豆蛋白のきな粉は、抵抗なくネパールの人達に受け入れられたのであります。

櫻井さんは、同じ女性として、女性の悩みがよく判ります。そこで、栄養失調の赤ちゃんを連れたお母さんと一緒に、掘立小屋に栄養教室を作りました。何時の間にか、この草葺き小屋がリハビリテーション・センターという英語で呼ばれるようになり有名になりました。

ビルディングでなく、草の根のお母さん達の台所と全く同じ草葺小屋であったことが、普及した第一の原因であります。何故ならば、センターで習ったことは、自分の家の台所でも直ぐ実践出来るからであります。センターで身につけたことは、生活の現場で、明日から直ちに実践できなければ、何もならないのであります。

櫻井さんがソッと手を貸したことによって、草の根のお母さん達は、自分で作ったトウモロコシコガシ、小麦コガシ、大豆コガシ（きな粉）の三種混合栄養食で、子供達を栄養失調から守ったのであります。そして、そのお母さん達の中からまたボランティアが生まれていったのであります。このように、開発途上国において病気や飢えを救済するには、自立のボランティア精神の種を播く以外に方法はないのであります。

自分の人生は、自分で責任がもてるように、自立心を育てていくことが絶対に必要なのであります。

したがって、絶対的貧困の社会へ行って、黒柳徹子さん流に『この子に愛を、この子にコインを』と言って集めた金で食料をいくら送っても、送られた間だけは食べることが出来ますが、長期的に慢性化した貧困は、金銭を与えるだけでは絶対に解決できないのであります。

20.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１６

前回は、長期的に慢性化した絶対的貧困の社会貧困では、金銭を与えるだけでは問題は解決できないことを申し上げました。そこでこの南北問題解決のためにＰＨＤ協会（PEACE・HEALTH・HUMAN DEVELOPMENT）があります。

これは、岩村先生にロータリーの第１回世界理解賞が与えられた時に、その賞金をもって設立された財団であります。

したがって、この賞金は、先生自身が使うのではなくて先生の働きを引き継いでいくリーダーシップを養成するために使うという条件がついているのであります。

では、具体的にはどんな仕事をしているのか、と言いますと、毎年、アジアや南太平洋から研修生を日本に招きます。それは、お百姓さん、漁師、村の女性等々であります。

但し、エリートは除きます。

何故かと言いますと、現地の人々の健康を守るには、人々を栄養失調から救い出し、絶対的貧困から救い出すことでありますから、草の根の人達自身に、食料を増産する意欲とか技術とかを持たせることが貧困を克服するためにどうしても必要だという考え方であります。

更に、何種類かの食事をとることにより、栄養のバランスがとれるという栄養と料理の知識と知恵を草の根の母親達が知ることが出来れば、８割の病気がなくなるという公衆衛生学上の計算からでもあります。

ところが、南北問題には、殆ど解決出来ない問題点があります。

ＰＨＤ協会の総主事であった故草地賢一さんの体験では、南の貧困は構造的なものだというのであります。

即ち、アジアの貧富の格差は、想像を絶するものがあります。例えば、スリランカの土地の６０％を僅か２％の人達が所有しています。この地主が、小作人に土地を貸して５０％の小作料を取ります。

ネパールでは、国民の１％の人達が９９％の土地を所有しています。

インドでは、国民の２％の人達が９８％の土地を所有しています。このように、僅か一握りの人のところへあらゆる物が集中していく構造になっているのであります。

このような世界で、貧しい人が経済的に力を持ち始めると、やがて、富裕な地主達は彼らを潰しにかかるのであります。

例えば、農薬を使わずに堆肥を使った有機農業方がよいことを学んで帰った研修生が自立して自分の畑を作ろうとしますと、開発途上国の地主と日本の農薬に関連する企業が絡んで、自立しようとする研修生を殺しにかかると草地さんは言うのであります。直接殺すのではなくて、交通事故で死んだように見せかけて彼らの命が奪われていくのであります。

このような視点から見ますと、社会構造が何処かで変えられなければ、人道主義的に現地へ行って何かをしてやるということでは、南北問題を根本的に解決することは出来ないことが判るのであります。

21.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１７

前回は、開発途上国の社会構造が何処かで変えられなければ、南北問題を根本的に解決することは出来ないということを申し上げました。

例えば、タイのチェンマイの東北にカレン人という少数民族がいますが、そこのコマ君は、日本で有機農業を学びました。

ところが、彼の住む村では、バンコックの金持ちがチェンマイの村人から米や野菜を作る畑を借りてトマトを作らせ、村人にそのトマト作りの賃金を支払っています。村人としては、自分の食べるものを自分の畑で作るよりも、チェンマイの金持ちから頼まれたトマトを作る方が、畑の賃貸料とトマトを作る労賃の二重の収入が入る訳であります。

しかし、そのためには収穫を上げるために農薬を使います。トマトは連作を嫌いますから次々と畑を移していきます。その結果、５年位でその辺の川に魚がいなくなったり、人々の健康が蝕まれてしまいます。

また、その農薬の被害を受けたトマトが日本に来て、トマトケチャップの材料になります。私達が、安いトマトケチャップを買って食べれば食べるほど村の畑が傷められ、人々は農薬の被害をうける結果となるのであります。（註）松本和正会員のアメリカのトマト栽培の話。

彼らの健康や自然が傷ついて行く代償の形で私達はトマトケチャップを使っているわけであり、この点に、国とか民族を超えた関係が出来上がってしまっているのであります。将に国際化社会であります。

ところが、農薬を使わない有機農業を学んで帰ったコマ君が畑を作ろうとする動き、即ち、タイの資本家のトマト畑では働かないという声に、このバンコックの金持達は、彼らを殺しにかかると言われているそうです。即ち、交通事故のように見せかけて彼らの命が奪われていくそうであります。したがって、これらが事実であるとすれば、社会構造が何処かで変えられなければ、人道主義的に彼らの自立を助けること自体全く無意味になるのであります。

また、フィリピンのネグロス島は、九州の３分の２位の島であります。そこには、８８万ヘクタールの砂糖黍畑を中心とした農地があります。この殆ど全てを２５６０人の地主が所有し、その内、８６０人の地主が２４万ヘクタールを持っています。この無茶苦茶な構造をずっと守っていくためには、砂糖黍が段々作れなくなったと言って農民が耕作を放棄し、米や野菜を作り始めますと、地主はこれを追い出しにかかります。

そこで、土地を守り豊かさの構造を守ろうとする地主達と、日雇いの農民達との間で生存のための戦争が始まるのであります。

地主が雇った兵隊が居ます。これが警察軍、国軍を助ける準兵士であります。

この兵士達の中にも非常に貧しい人達が居ますから、兵士達が同じ貧しい人達を殺すことは大変つらいことであります。そこで、この準兵士達に朝から非常に強い酒を飲ませたり麻薬を与えることにより仲間を殺すことを麻痺させるのであります。これが現実の社会構造であります。世界社会奉仕の道は遙かに遠いと言わざるを得ません。

22.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１８

今日は年度末でありますので世界社会奉仕の話も一旦終っておきます。

さて、先進国は、様々な商業製品を作り販売することによって強い経済力を持ち、しかも南の貧しい人達を消費者としてこれを売りつけます。

そして、この商品が売れるためには、先ずマーケットが確立されなければなりません。そして、マーケットを広げるためには、相手の国の代表的な人達と繋がって行かなければなりません。その人達の数は、フィリピンでは大体６％、タイでは１５％だと言われています。このような人達と繋がっていくことによって、マーケットは拡大されて行きます。と謂うことは、その人達の安定した生活を保つために政治が行われることであり草の根の人達のためではありません。開発途上国の一部の政治的、経済的、宗教的な力を持った人達を代表する政治に対して日本のＯＤＡ（政府開発援助）が流れていくのであります。

また、南の国の食糧難の問題があります。

昔は、沿岸の漁民は少し沖に出れば魚が沢山獲れましたから人々の生活と栄養が支えられて来ました。しかし今、その漁場は、外国資本のハイテクの大型漁船が来て能率よく漁をするため、感を頼りにする小さな漁船の手に負えなくなりました。そこで、漁民は、タブーである沿岸の稚魚に網をかけます。稚魚を捕れば魚が育たず、益々痩せた海になることを承知の上のことであります。この自暴自棄的な漁によって、育ち盛りの子供に与える魚を捕るのであればまだ納得出来ます。しかし、もっと悲しい現実があります。

それは、沿岸で獲れる稚魚や雑魚を買い叩いている業者がいます。漁民はそれを子供に与えるよりもお金ほしさに業者に売ります。そして、その稚魚は日本のスーパーマーケットのペットフードの缶詰の中身になるのであります。（犬飼道子著「人間の大地」1983年中央公論社）このようにして私達は、意識しないままに南の国の豊かな食料を食べ尽くし、時には「まずい」とか「古くなった」と言っては捨てます。私達の知らず知らずの傲慢や見栄が南の国の人達を苦しめているのであります。

以上を要するに、現在、人類の共生が構造的に不可能な状況になっている仕組みや基本的な理解がないと、人々が共に生きるという世界社会奉仕の理想は、一時的なキャッチフレーズに終わってしまいます。

現在のＲＩや各クラブの実践している世界社会奉仕の活動の実体は、金銭奉仕・団体奉仕ばかりであります。自立心の養成を目的とする非金銭奉仕、労務奉仕・個人奉仕という本来の世界社会奉仕の実現ということを考えると、道は遙かに遠いと謂わざるを得ません。

しかし、世界社会奉仕は、現代の 国際ロータリーの夢のあるところであります。しかも、世界社会奉仕は、ロータリーの悲願であり、ロータリーの嫡流であります。原理の流れの視点から見ると国際奉仕の方がむしろ亜流なのであります。したがって、私達は、何としても世界社会奉仕の理想の実現に努めなければならないと思うのであります。

「四大奉仕の活性化」
ＲＩ第２５８０地区大会パネルディスカッション発題

2011.2.23

深　川　純　一

今日は、四大奉仕の活性化というテーマのパネルディスカッションの発題をするように、とのことであります。そこで、先ず、プロローグであります。

昔々の原始時代の未だ明けやらぬ夜明けの場面から話に入ります。真っ暗闇の世界に心臓の鼓動のようにリズミカルな太鼓の音が聞こえてきます。やがて暗い画面が次第に明るくなり始めると、小鳥の囀りが聞こえ始めます。そしてナレーションが流れます。「早起き鳥が朝鳴いて、やがて夜が明け朝が来る」黒人のヴォーカルグループ"Golden Gate　Qualtet"が、リズミカルなNigro spiritual黒人霊歌を歌い始めます。

これは私の青春時代、昭和２４，５年頃に観た或る映画の一場面であります。「はじめにリズムありき」やがてリズムに合わせてメロディーが生まれます。このようにしてJazzが生まれて来たのであります。

これをロータリーについてみますと、「はじめに親睦ありき」先ず親睦のリズムがありました。それは規則正しい例会のリズムであります。やがて、その例会のリズムに世のため人のための奉仕のメロディーが生まれ、そして、ロータリーの世界が明るくなりました。時に１９１０年、ポール・ハリスが「ロータリーは、親睦と奉仕の調和の中に宿る」と悟ったときでありました。これがロータリーの思想の原点であります。

そこで、当時のロータリアン達は、親睦と奉仕をどのように考えていたのか。

先ず、クラブを中心に考えて、クラブの内では、親睦の内に奉仕の心をつくる、即ち、ここは心を作るところ、即ち親睦の世界。したがって、親睦は奉仕の元であります。

これが一番大事なところであります。

そして、クラブを一歩外へ出ると、そこは作られた奉仕の心を日常生活万般に適用するところ、即ち実践の世界。したがって、実践は奉仕の末であります。このように、クラブの内は親睦の世界、クラブの外は実践の世界であります。

そして、１９２７年、ＲＩは、それまでの原理探求のロータリーから実践のロータリーへと奉仕活動の重点を置くために、奉仕の元である親睦の世界をクラブ奉仕と名付け（謂わば内なる奉仕）、奉仕の末である実践の世界を三つに割って、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕としたのであります（謂わば外なる奉仕）。

そこで、先ず、クラブ奉仕であります。これは、今申し上げたとおり、内なる奉仕、即ちロータリーの奉仕の基本類型であります。

ところで、クラブ奉仕には二つの側面があります。

第１は、ロータリーの組織の側面、即ち、定款細則の側面であります。ロータリー運動を法的な原則の面から原理立てて理解することであります。即ち、クラブ奉仕とは、自己研鑽の自覚をもって、定款細則の定めるところに従いクラブの管理運営の一翼を担うべき奉仕の実践類型のことであります。

第２は、ロータリアンの精神世界の側面、即ち、倫理の側面であります。これは、法的なルールに従って行動しても、それが直ちにロータリアンとしての正しい行動にな

るかどうか判りません。したがって、全てのことは、ロータリー運動に参加するロータリアンの自覚、即ち、精神世界の問題がどうしても一枚入って来ざるを得ないのであります。

この精神世界の問題は、権利義務の問題ではありませんから『これをしなさい』と言っても法的に強制出来るものではありません。『勉強しなさい』と言っても、本人が勉強する気にならなければ教育効果は上がりません。これは将に教育の課題でありまして、このように法的強制の出来ない分野のことを倫理の世界と謂うのであります。

要するに、クラブ奉仕論を理解するには、先ず第１に、定款細則を中心に法律論的な理解をすること、即ち、客観的な行動のルールを身に付けることが必要であります。それと同時に、その根底に道徳的な、倫理的なルール、即ち、主観的な精神面のルールを身に付けなければならないのであります。

それなくしてクラブ自治権を確立することは出来ないのであります。

したがって、倫理的な意味におけるクラブ奉仕論がどうしても必要であって、定款細則だけのクラブ奉仕では、心がありませんから三百代言のロータリーになってしまいます。これでは本当のロータリアンが育たないのであります。

したがって、ロータリアンが親睦の内に奉仕の心を作るという観点から、倫理的な意味におけるクラブ奉仕の原則を立てて、それを根底に法律的な定款細則の議論をしなければならないと思うのであります。これがクラブ自治権確立の基本前提なのであります。

では、クラブ奉仕における倫理原則とは、一体どのようなものか。

第１に、自己研鑽の自覚を持って、ロータリーのあらゆる会合に参加することであります。自己研鑽の自覚、即ち、忙しいのに何故例会に出なければならないのか。忙しければ忙しいほど例会に出よとロータリーが言うのは一体何故か。それは自分を磨くという倫理的な目的を持って会合に参加しなければならないということを意味しているのであります。

第２に、自分を磨くためにロータリーの会合に参加するのでありますから自分自身が出席しなければなりません。

例えば、クラブ会長は自分を磨くために会長職を務めるのであり、クラブ幹事は自分を磨くために幹事職を努めるのであります。したがって、幹事は事務職員にはあまり仕事をさせてはなりません。その分だけ自分が磨かれないことになるからであります。出来るだけ自分自身で事務処理をするべきであります。事務職員を使うとしても事実的な行為で重要でない仕事に限ることが望ましいのであります。これを法律的には履行補助者の理論というのであります。

したがって、事務職員は、ロータリー運動の履行補助者なのであります。

そして、事務職員は効率を重んずる世界に棲んでいますが、ロータリアンは奉仕哲学という質の世界に棲んでいます。両者は棲んでいる世界が異なります。したがって、効率の世界の論理をもって奉仕哲学という質の世界の事務をコントロールすることは厳に慎まなければならないのであります。

ロータリー運動というものは、全て奉仕哲学に基づいて営まれるものでありますから、ロータリアンは、奉仕哲学という質の世界の論理をもって、ロータリー運動をコントロールしなければならないのでありまして、些かなりとも、ロータリー運動上の重要な事務処理を事務職員に任せてはなり

ません。

要するに、ロータリアンは、自己研鑽即ち自分を磨くためにロータリー運動に参加するということを忘れてはならないのであります。

したがって、ロータリアンは、ロータリー運動上の義務を他人に委ねてはならないのであります。何故かと言いますと、それが自己研鑽の契機だからであります。したがって、ロータリアンのロータリー運動上の権利義務は、ロータリアンの一身専属権であると謂えるのであります。

それは、代理とか代行とかに親しまないことなのであります。例えば、結婚は必ず本人がしなければなりません。代理人によって結婚することは出来ないのであります。新婚初夜の代行を頼むような人は居ないと思います。

第３に、クラブの中における均一的平等の原則があります。ロータリー運動というものは平行運動の要素がありまして、福沢諭吉先生の『ロータリーは、人の上に人を作らず、人の下に人を作らず』即ち、ロータリアン同士の間においても、人の上に人を作り、人の下に人を作ってはならないのであります。このことを保障するために、ロータリーは創立以来、クラブの通常経費は、クラブ会員の頭数で割って、均分に負担すると言う原則があるのであります。したがって、パストガバナーも、昨日入会した新会員も、クラブの会費は同額なのであります。

何故、同額なのか。それは、クラブの財産権を同じ持ち分で共有するが故にクラブを管理するに当たっては発言権は平等なのであります。

これは、クラブというものが完全にリベラルな平等対等の社会だからであります。

これがクラブという社会制度の論理なのであります。

ロータリアンは、ロータリーの例会に参加するときには、世俗の憂きことを忘れて、人の上に人を作らざる、人の下に人を作らざる、そのような純粋心の世界の中から純度の高い心と心を通わせるのでありまして、これがクラブ奉仕の中核にある考え方であります。そうでなければ心は通わないのであります。

昔、桐生のロータリークラブの初代会長が、『ロータリーの例会はロータリアンがお互いに神様になり合う時間である』と言いました。これは多少当てずっぽうなところもありますが、将に正鵠を射た表現であると思うのであります。『ロータリーの例会は、ロータリアンがお互いに神様になり合う時間である』世俗の憂きことを忘れて、神様と神様との間には格差はありませんから、大企業の社長も、小企業の社長も、大学卒も、そうでない人も、ロータリーの世界では対等であり平等であります。これを均一的平等の原則というのであります。これは、非常に大事なところであります。

第４に、この均一的平等の原則があればこそ、ここから『ロータリー精神』即ち、Spirits of Rotary が出て来るのであります。

したがって、ロータリー運動に参加して、お互いに心と心を通わせて、自分の心の中に他のロータリアンの良質な心の状態というものを映し植えて、そこから何某かのものを学んで立ち去るという、その最も良質なものを学んだことによって、自分というものが育てられて行く、ロータリーというのはこのような動態的な概念なのであります。

例えば、私というものは今ここに居ますが、この私は例会に出る前の私ではありません。また、例会に出た後の私とも一寸違

います。しかし、今の私として固定されるべきものではありません。絶えず自分というものの内容がドンドン高まっていく。そのエネルギーを与えるものは他のロータリアンであります。他のフェローロータリアンが、毎週一回の例会でエネルギーを与えてくれるのであります。これが切磋琢磨であります。それによって自分の精神世界が無意識的に質的に高まって行くのであります。即ち、『心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る』他のロータリアンとお付き合いをすることによって、自分というものが育てられて行くのであります。これを、ロータリーのフェローシップとかロータリー精神を育む世界というのであります。

１９７４－７５年度の国際ロータリー会長 William R.Robbins は、『ロータリー精神を奮い起こせ』"Renew the spirit of Rotary" というターゲットを打ち上げましたが、これはクラブ奉仕の中核を突いている意味において、将にホームラン的な素晴らしいターゲットであると謂えるのであります。

次に社会奉仕は、例会で得た新しい発想をもって家庭及び地域社会を潤すべき奉仕の実践類型であります。

第１に注意すべき点は、１９２７年以前と以後とでは奉仕という言葉の意味が全く異なることであります。１９２７年以前は、ロータリーの奉仕全般、即ち、クラブ奉仕、社会奉仕、職業奉仕、国際奉仕を一括して、単に奉仕という言葉を使っていました。決議２３－３４号で使われている奉仕がこの意味であります。

これに対し、１９２７年以降は、この奉仕を四つに割って、クラブ奉仕、社会奉仕、職業奉仕、国際奉仕となりました。したがって、現在、社会奉仕と謂えば地域社会奉仕の意味であります。

このようにして、ロータリーの奉仕には内なる奉仕としてクラブ奉仕、外なる奉仕として社会奉仕、国際奉仕、職業奉仕があります。沿革的に見ると社会奉仕は外なる奉仕の最初のもの、謂わば原始類型であります。

社会奉仕の行動類型は、千差万別であります。例えば、新聞売り子や馬を死なせた牧師を助けたり、シカゴの町の公衆便所を作ったりしています。やがてこれが、青少年奉仕、身体障害者奉仕、精神障害者奉仕そして高齢者奉仕などに類型化されていきました。そして、これらのどの類型にも当てはまらないものに、ロータリー本来の社会奉仕があることを忘れてはならないのであります。例えば、清掃奉仕や社会の歪みに落ち込んで救済を求めている人達に対する弱者救済等であります。これには個人奉仕的なものも団体奉仕的なものもありますが、ＲＩレベルにおいて、従来の個人奉仕のロータリーに団体奉仕を導入したのが決議２３－３４号でありまして、その歴史的意義は非常に大きいのであります。

さて、話を個人奉仕に戻します。初期ロータリーは、クラブを中心に考えて、クラブの中では親睦の内に奉仕の心を作り、クラブの外では、その奉仕の心を実践すると考えました。したがって、親睦とは奉仕の心を作ることであり、奉仕の心を作らずして実践を考えることは出来ないのであります。

達磨大師の伝法の言葉に、『一花五葉を開く。結果自然にして成ず』（奉仕の心を作れば実践は自ら至る）という言葉があります。

即ち、蒔いた種が芽生えて茎が伸び、やがて葉が開き、その頂きに花が咲くように、物事の結果は自然に成就する、という意味であります。したがって、ロータリーも、奉仕の心を作れば、その心は自然に実践さ

れる、即ち、結果自然にして成ず、と考えたのであります。しかし現実は、奉仕の心が作られてもそれが実践されないことが多かったのであります。

実は、これを防ぐために、決議２３－３４号第４項が規定されたのであります。即ち、『ロータリーの奉仕とは、単に心の状態に止まるものではなく、その心が行動（実践）として客観化されたものをいう』と規定されたのであります。

要するに、１９２３年のセントルイスの国際大会において、ロータリアンは、実践を通じて原理を検証する世界を開発しなければならないという自覚が生まれ、それが決議２３－３４号という国際大会の決議となったのであります。

そしてこの決議を踏まえて１９２７年のＲＩ理事会は、『今までのロータリーは原理探求のロータリーであった。これからのロータリーは、実践活動を通じて、逆に原理を検証する世界を運動の路線として取り上げよう』ということになりました。そこで、心を作るクラブの内をクラブ奉仕、心を実践するクラブの外を三つに割って社会奉仕、職業奉仕、国際奉仕として四大奉仕としたのであります。

ただ、一つ注意しなければならないことは、ロータリーは実践が大切だと言ってロータリーにだけ集中し、一般地域社会の弱者に対しては一切関与しない人がいます。例えば、ロータリー財団や米山奨学会には多額の寄付をするが地域社会に対しては一切寄付をしない人がいます。これはよろしくないのであります。私達はロータリアンである前に地域社会の住民であることを忘れてはなりません。

そこで、次は国際奉仕であります。元来、クラブというものは閉鎖的なものであります。そのことは原始ロータリーを見れば判るように、それは会員だけの親睦の世界でありました。

しかし、やがて世のため人のための奉仕という考え方が入ってきて、世のため人のためのクラブであればシカゴにだけ在って然るべきものではない、全アメリカの地域社会に在って然るべきものだと考えてロータリーの拡大が始まりました。しかも、一業一会員制によって地域社会の全ての職種から会員を集めるだけでなく、社会的地位・身分そして人種・信条更に宗教までも全く異なった人達がロータリーで友達になるようになったのであります。

昔、１９１１年、ロータリーをイギリスに拡大しようとした時、あの階級意識の強いイギリス人をロータリーに入れることなど到底無理だという悲観論がありました。

イギリス貴族が町の八百屋の親父さんと友達になれると思うのかというのであります。

しかし、現にロータリーはそれを実現してしまったのであります。

そして、人種、宗教、社会的身分の垣根を取り払ったロータリーは、今や国境の壁も乗り越えて、世界中に拡大されています。

これは、多種多様であることを財産とするロータリーだからこそ出来たことでなのであります。

これは将に、ロータリーにおける親睦の効果であります。このように、色々なクラブがあってよいのあります。色々な傾向の人達がいてよいのであります。そして、皆が仲良くなって世の中に役立つことをすればよいのであります。

そこで、一つ心に留めておくべきことがあります。それは最近２０年来、ＲＩの指導者の多くは、人類愛を説き、人道主義的ロータリーを提唱しています。

しかし、ロータリーの根底に流れる愛は、このようなキリスト教的な人類愛に限るものではありません。この世に生きとし生けるもの全てに対する愛であります。それは鳥や獣のみならず将に一木一草に至るまで、神様から与えられた命を懸命に生きているのであります。このことを忘れては、真の環境保全も公害予防も果たせないと思うのであります。私は、曾て佐藤千壽パストガバナーが自社の工場建設に際し、奥羽街道の松並木を伐採せずに残されたことを想うのであります。これは現象的には環境保全の一環でありますが、私は、佐藤先生の心の根底に松の木に対する深い愛を感じるのであります。この愛は、キリスト教などの宗教を超えた大いなるもの「この宇宙を統べて在る大いなるもの」の愛であります。

要するに、ロータリアンは、職業奉仕や社会奉仕更には国際奉仕や世界社会奉仕を実践するときに、このような生きとし生けるもの全てに対する愛の心を忘れてはならないと思うのであります。

さてそこで、国際奉仕の論点は一体何か。

第１に、世界中には、国家と呼ばれる最高、絶対且つ無責任の団体が乱立し、利害の対立するときは力の行使をもってこれを解決しようとます。これが戦争であります。

このような状況の中で、ロータリーは、個人の善意を育てていく立場から一体何が出来るかという問題があります。このように、国際奉仕は、国家の存在を前提とし、戦争を契機として出てきた概念であります。

このように、国家間の利害の対立の中で、個人の善意をもって解決すべき奉仕の実践類型を国際奉仕というのであります。

第２に、国家間の利害の対立を越えて、戦争では決着のつかない全く新しい問題が出てきました。所謂南北問題であります。

ロータリーは、この問題に対するロータリーの個人の善意の働きかけの分野を１９６２年から世界社会奉仕ＷＣＳと呼んでいるのであります。

したがって、この概念定義は、国際奉仕とは必ずしも原理的に共通の基盤を持たないのであります。概念の立て方の理由が違いますから、国際奉仕を世界社会奉仕と狭義の国際奉仕とに分ける考え方は原理的に正しくないのであります。

原理的に見ますと、世界社会奉仕は、国際奉仕と謂うよりはむしろ社会奉仕の範疇に属するものなのであります。即ち、地域社会奉仕の延長線上に、それをそのまま世界大に拡大したものが世界社会奉仕でありまして、社会奉仕とその原理的基盤を共通にするものなのであります。したがって、世界社会奉仕の方がロータリーの本流に属する奉仕であり、社会奉仕の嫡流というべきものであります。

これに対し、国際奉仕は、国家の存在を前提とし、戦争を契機として生まれた概念でありますから、原理的にはむしろロータリーの奉仕としては傍流に属するものなのであります。

なお、１９６２年に始まった世界社会奉仕は、純理としては将にロータリーの悲願とも謂うべきものでありましたが、１９６３年にＲＩの世界社会奉仕委員会は、先ず数名のパストガバナーによって世界各地で約１年間の実験をしました。そしてその結果を集約したところ、言語上の障害や風俗習慣の相違その他の原因によって失敗に終わったので、この委員会を解散してしまったのであります。

そこで、ＲＩは、それまでの個人奉仕、労力奉仕による本来の高潔な世界社会奉仕からレベルダウンして、団体奉仕、金銭奉

仕によることになったのが現在の世界社会奉仕であります。

そして、１９６６年にリチャード・エヴァンスＲＩ会長が、このプログラムにもう一つ付け加えた要素があります。それは、援助を求めるクラブと援助を提供するクラブとの間にＲＩが立って仲人になり、そのプログラムのライブラリーを作って実践するという方法であり、これが現在の世界社会奉仕であります。

第３に、ロータリーは、国際奉仕のニーズを解決する方便の問題として、ロータリー財団という原理的に真に奇妙な制度を作り上げました。

これは原理的には非常に問題のあるところでありますが、しかし、今日、ロータリー財団は、立派な仕事をしていますので、私達の腹構えを作るためにも理解を深めなければならない分野だと思うのであります。

第４に、クラブが事業計画として企画、立案する国際奉仕及び世界社会奉仕のプログラムとロータリーの本願である個人奉仕の実践の問題があります。以上が国際奉仕の主たる論点であります。

最後に職業奉仕であります。人はその顔が皆違うように、考え方もそれぞれ皆違うのであります。したがって、クラブでも仲間が増えれば増えるほど違う意見も増えるのであります。だからこそ、お互いを理解するためには話し合うことが必要なのであります。

ここに、ロータリーでは職業の違う人達が毎週例会に集まって話し合うことの意味があるのであります。

昔、ポール・ハリスは「一種類の花、同じ色ばかりの花壇に何の面白さがあろうか。色々あってこそ人生に薬味がきくというものだ」と言っています。

人によって様々な意見の違いがあってこそ人生は面白いのであります。ここに、ロータリーが一業一会員制をもって、それぞれ違った職業から会員を集めることの良さがあるのであります。

元来、ロータリーも色々な顔を持っています。したがって、職業奉仕も色々な視点から分析する必要があります。先ず、職業奉仕の歴史の視点、思想の視点、原理の視点そして実践の視点があります。したがって、これを総括的に纏めることは、かなり難しいのであります。

そこで、職業奉仕を理解する上で一番大事なことは一体何か、と言いますと、『ロータリーとは、人類文化史が２０世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動である』ということであります。この倫理運動であるという視点を見失いますと、ロータリーの職業奉仕が判らなくなり、ひいてはロータリー自体が判らなくなるのであります。

では、ロータリーが倫理運動であるということが、一体どこに書いてあるのかと申しますと、標準ロータリークラブ定款第４条の『ロータリーの綱領』をみますと、ロータリーが将に倫理運動である、ということが一目瞭然に判るだろうと思うのであります。殊に、ロータリーの綱領の第２は、職業倫理に関する規定であり、これは職業奉仕の中核部分であります。

何はともあれ、ロータリーは、倫理運動であるが故に、古来、色々な理念を提唱し、様々な原理を開発して来ました。したがって、ロータリーと謂うものは、２０世紀初頭以来、先輩達が残してくれた尊い知恵の結晶なのであります。したがって、縁あってロータリーに入った以上はこの知恵に学ばなければなりません。

そこで、知恵に学ぶ、ということについて若干の補足をしておきます。即ち、ロータリーというものは単に知識として知っているだけでは駄目でありまして、ロータリーの中で色々な体験を積み重ねることによって初めてロータリーが身に付くのであります。したがって、ロータリアンは、例会で卓話を聞き、異業種の良質な人達との接触を通じて人生万般のことを学びます。そして、学んだことは忘れてもよろしいが、その体験を積むことによって、初めてロータリーが身に付いていくのであります。一挙手一投足がロータリーになっていくのであります。単なる知識に止まることなく、そこに智慧が生まれるのであります。したがって、ロータリーの奉仕の実践、殊に職業奉仕の実践は、先ず例会に出席することから始まるのであります。したがって、『私は職業奉仕が忙しいから例会には出席できません』などという言葉は、職業奉仕を全く理解していないことを物語るものであります。

以上をもって、四大奉仕活性化のディスカッションの発題と致します。御静聴ありがとうございました。

「職業奉仕の原点」
ＲＩ第２５８０地区大会会長代理基調講演（９０分）

2011.2.24

深　川　純　一

只今、ご紹介をいただきました２６８０地区の深川でございます。このたびは、歴史と伝統に輝くこの２５８０地区年次大会にレイ・クリンギンスミスＲＩ会長の代理として出席させていただくことになりました。誠に光栄に存じおります。

今日は、この地区大会の主催者である上野操ガバナー始め田中作次国際ロータリー会長エレクト、そして元ＲＩ理事、地区内外のガバナー、パストガバナー、ガバナーノミニー、そして各クラブの代表権者である会長幹事の皆様、そして沢山のロータリアン並びにその奥様方がご臨席でございます。真に身の引き締まる思いであります。

御覧のとおりの弱輩でございますので、どうかよろしくお付き合いのほどお願い申し上げます。

実は、ここの地区大会は、５年前の古宮誠一ガバナーの地区大会にも、やはりＲＩ会長代理としてお邪魔していますので、親しくお顔を存じ上げている方も沢山居られまして誠に懐かしく、また心強くも思っている次第であります。

殊に上野ガバナーは、私と同業の弁護士であられまして、一昨年お亡くなりになりました東京東クラブの佐藤千壽パストガバナーの謦咳に親しく接しられた方であります。殊に職業奉仕についての造詣も深く、私も佐藤先生と一緒に幾たびか同席致しましたが、その語り口は、実に簡潔にして要を得たものであり、静かに説き来たり説き去るというお人柄そのものの暖かさを感じるものであります。今日の地区大会が上野ガバナーのお人柄を象徴するような高潔な地区大会になるように祈って居る次第であります。

さて、通常、地区大会におけるＲＩ会長代理の話というものは、ＲＩ会長の紹介に始まりＲＩの現況報告及びＲＩ会長代理の所見の披瀝ということになるのでありますが、今回は、上野ガバナーの御意向により、ＲＩ会長のプロフィールなどは既にロータリーの友を始めガバナー月信等により皆様方周知のことであり、また、ＲＩの現況についても今日の発達した情報化社会では、既に皆様方に公知の事実でありますので、これらのことは時間の関係上割愛致します。

ただ、ＲＩの現況については、一点だけ特筆すべきことがあります。それは、もう皆様方既に御承知のとおり、埼玉県八潮ロータリークラブ所属の元ＲＩ理事田中作次先生が２０１２～１３年度の国際ロータリー会長エレクトとして選出されたことであります。

顧みますと、我が国は世界第２のロータリー国と言われながら、１９８２年度の中津の向笠広次元ＲＩ会長以降、実に３０年の長きに亘ってＲＩ会長を選出していなかったのでありまして、今般、田中先生がエレクトに選出されたことは、日本のロータリーにとって真に目出度く且つ意義のあることであり、満腔の敬意を表するものであります。なお、皆様御承知のとおり、国際ロータリー会長は大変な激職であります。

したがって、先生には何よりも健康第一、呉々も御自愛の上この大任を全うされるこ

とを祈っております。

このような次第で、今日は、従来の一般の地区大会とは若干趣を異にしまして上野ガバナーより、「職業奉仕の原点」というテーマで講演をするように、との御依頼を受けております。そこで今回はロータリー創立記念日でもありますので、古き佳き時代のロータリーにも触れながら、「職業奉仕の原点」について私なりの所見を申し述べたいと思うのであります。

さて、「職業奉仕の原点」というテーマは、ロータリー思想の中核にある非常に大きなテーマでありますので、色々な視点から分析しなければなりません。

しかし、今日は、とてもその時間がありませんので、「職業奉仕の根本原理」を中心に、それに関わる限りにおいて職業奉仕の歴史の視点と思想の視点そして実践の視点から若干のお話を申し上げたいと思うのであります。

さて、何事に寄らず物事の原点ということになりますと、どうしても歴史の話に関わって参ります。

そこで先ず、１８５０年にこの世に生を受け、１９０６年、ロータリーが始まった翌年に突如としてこの世を去ったイギリス法史学会の権威、ケンブリッジ大学のフレデリック・メイトランド教授 Frederic William Maitland の言葉を引用致しますと、「我々が歴史を学ぶのは、単に過去を追憶するためではない。過去に学ぶことによって初めて正しく現在を認識することが出来るのであり、過去、現在の正しい認識を踏まえて初めて正しく未来を展望することが出来る。したがって、歴史を学ばないものには、現在及び未来を語る資格はない。」と断言しているのであります。そこで、今日は、ロータリーの歴史についての若干のイントロダクション的な話から入っていきたいと思うのであります。

さて、２０世紀の初め、シカゴの町の片隅に生まれた真に小さな集いが、やがてアメリカ全土に拡がり、遂に世界中に広がっていきました。それが後に至ってロータリーと呼ばれる運動体でありました。そのエネルギーの源泉は一体何か。

ロータリーは「始めに親睦ありき」。その親睦のエネルギーが、やがて奉仕を生み、その親睦と奉仕のエネルギーが、シカゴの町からアメリカ全土に拡がり、やがて国境を越えて世界中に拡がって行ったのであります。

ここに、今年度のＲＩ会長レイ・クリンギンスミス氏の提唱した「地域を育み、大陸をつなぐ」というテーマの全ての意味があります。即ち、地域はロータリーの育つところであり、ロータリーは先ずクラブの親睦を育むところであります。したがって、ロータリーは親睦に始まり、奉仕を育て、そしてロータリーの拡大へと発展して行ったのであります。

では、何故、地域から大陸へ、即ち地域社会から世界社会へと拡大されたのか。

それを語るには、ロータリーのそもそもの濫觴の物語から始めなければなりません。そこで、この親睦と奉仕のエネルギーを生み出した原点は一体何か。

それは、ポール・ハリスという１人の青年弁護士の頭脳に宿った只一滴の発想、即ち、一業一会員制の発想でありました。一つの職種から１人だけ選ばれた良質な職業人の親睦のエネルギーが、やがて世のため人のための奉仕という考え方を生み出したのであります。そして、世のため人のためのクラブであれば、それはシカゴにだけあるべきものではない。全米の地域社会にあっ

て然るべきものだということになり、このようにして、親睦が奉仕を生み、奉仕が拡大を生んだのでありまして、そのそもそもの濫觴は親睦であったのであります。

そこで私は、この親睦というものを考えるとき、原始時代の人々に思いを馳せるのであります。原始時代の人々は、大自然の厳しい寒さから身を守るために、お互いに身体を寄せ合い、肌と肌を寄せ合って身体を温め合いました。そして仲良くなって、心が通い合ったのであります。これが親睦の始まりであります。鳥や獣もお互いの体温で温め合い暖を採ったように、そのことによって自分が温かくなると共に相手も温かくなるということを本能的に知っていました。

やがて、人々は、自分の温もりを相手に与えて、相手の温もりを自分に授かる、ということに気づきます。ここから相手に対する愛が始まり、奉仕の心が生まれたのであります。これが親睦と奉仕の原始形態であります。したがって、親睦そのものの中に奉仕の要素があった、即ち、親睦と奉仕は本来一体のものであったのであります。

ということは、ロータリーは、親睦に始まり親睦に終わるのであります。

このように、親睦と奉仕は本来一体のものであったという深層心理から、やがてポール・ハリスは「親睦のエネルギーを世のため人のための奉仕に」と考えるに至り、遂に１９１０年、「ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る」と大悟するに至ったのであります。これがロータリーの思想の原点であります。したがって、ロータリーの中心概念は、親睦と奉仕なのであります。

さて、この親睦と奉仕を考えるとき、その根底にあるものは一体何か。先ず、一つの俳句を紹介しておきます。

爛々と昼の星見え菌生え　　高浜虚子

これは、正岡子規と共に日本の近代俳句を唱導した高浜虚子の代表句の一つであります。終戦直後の昭和２２年、１９４７年の作品であります。

「爛々と昼の星見え菌生え」

国破れて山河あり。当時、戦災で何もかも焼き尽くされ、荒涼とした日本の原風景がありました。工場の煤煙もなく澄み切った大空。公害もなく活き活きとし山川草木。そして、国民は、食べる物も着る物も住むところもなく、私達は貧困のドン底にありました。

そのような状況の中で、神経の研ぎ澄まされた高浜虚子が見たものは一体何か。それは真っ昼間の大空に爛々と輝く星、そして、荒れ果てた大地に群がり生えている菌であったというのであります。おそらくこれは毒茸であろうと思います。ただ、私は、この一句から、太陽の限りない恵みと、生きとし生けるものの逞しい生命力を感じるのであります。

ところで、この一句の意味は一体何か。

真っ昼間の大空に爛々と星が輝いて見える、そして菌が群がり生えている、という将にこの世のものとも思えない異様な情景であります。即ち、菌は目に見えますが、真昼の星は目に見える筈がありません。しかし、虚子はその星が見えるというのであります。

一体、彼は何を言わんとしているのでしょうか。

私の解釈は、目に見えている菌は現象の世界のものであります。一方、目に見えない昼の星は本質の世界のものであります。

現象の世界というのは、般若心経に所謂「色即是空」の「色」の世界、即ち、美人だとか、肌の色が白いとか黒いとか、背が高

いとか低いとか、所謂、私達の目に映っている世界であります。

これに対して、本質の世界というのは、例えば、「月落ちて天を離れず」という言葉がありますように、お月様が西の空に沈んでも、月は大空即ちこの宇宙を離れる訳ではありません。したがって、この「月落ちて天を離れず」という言葉は、この宇宙を統べてある物事の真理を述べたものなのであります。即ち、星というものは真っ昼間は目に見えなくても、厳然として大空に存在し、輝いている、というのであります。

これが物事の本質であります。

したがって、高浜虚子は、この世の中には、菌という目に見える現象の世界と、真昼の星という目に見えない本質の世界があるということを感じ取って、その時の感懐を花鳥諷詠詩としての俳句に詠み上げたのであります。

そこで、私は、ロータリーの世界でも、制度とかクラブ活動のような「目に見える現象」に惑わされることなく、ロータリーは本来如何にあるべきか、という「目に見えない本質」を見抜くことが大切であると思うのであります。

したがって、今日の私の話に一貫して流れるものは現象と本質についての思索であります。

そこで、冒頭に申し上げました「爛々と昼の星見え菌生え」という俳句に話を戻します。実は、高浜虚子がこの俳句を作った１９４７年、この年とその前年に二人の偉大なるロータリーの指導者が相次いでこの世を去りました。

一人は、ロータリーの創立者ポール・ハリスであり、いま一人は、日本ロータリーの創立者米山梅吉先生であります。

それ以後今日まで約６５年の歳月を閲します。その間ロータリーは随分変わりました。そのことについての善し悪しは、今日私の論ずるところではありません。

私は、ただ、ロータリー創立記念日に因んでお二人の遺徳を偲びロータリーにおけるお二人の活躍の軌跡を簡単に振り返ってみたいのであります

先ず、ポール・ハリスは、ロータリー創立の１９０５年から戦後１９４７年１月２７日にこの世を去るまでの４２年間、アメリカの繁栄と共に燦然と輝くロータリーを見届けてこの世を去りました。したがって、その後のロータリーの変貌を知らずにこの世を去ったのであります。もし、彼が今のロータリーの状況を見たとすれば、果たして何と思うでしょうか、興味のあるところであります。

一方、米山先生は、東京ロータリークラブの創立即ち、日本ロータリーの創立された大正９年から昭和１５年の軍閥の弾圧による日本ロータリーの壊滅までの２０年間、そしてその後、戦中、戦後の隠れキリシタンの如きロータリーの東京水曜会時代、その昭和２１年４月２８日、日本の国際ロータリーへの復帰を見届けることなくこの世を去られました。さぞ無念であったろうと思うのであります。

また、米山先生は、個人奉仕の実践については、“Service,Not self”の自己犠牲の世界に生きた人でありました。その個人奉仕の対象はロータリーに限らず、広く一般地域社会に向けられたものでありました。

その結果、最後は破産直前に瀕してまで世のため人のための奉仕に尽くされたのであります。

このように先生のロータリー活動は、将に波瀾万丈を極めたものでありました。この点、ポール・ハリスとは非常に対照的で

あります。

しかし、このお二人に共通しているところは、ロータリーのために素晴らしいリーダーシップを発揮されたことであります。

殊に、米山先生は、東京ロータリークラブ初代会長２期連続、日本のガバナー制度が出来る前のSpecial Commissioner ２期連続、初代ガバナー３期連続、日満ロータリー連合会初代会長２期連続、日本の無地区時代のＲＩ理事など、日本の戦前のロータリー運動の中でこれ位ロータリーの支柱となってリーダーシップを発揮したロータリアンは、米山先生をおいてほかにないのであります。

日本ロータリーの歴史上、過去、現在、未来を見て、これ位ロータリーのために貢献出来るロータリアンは、今後おそらく現れることはないであろうと思うのであります。将に空前絶後と謂うべきであります。

そこで、この米山先生の遺徳を偲んで戦後、東京ロータリークラブが米山記念奨学会を発足させたことは周知の事実であります。

さて、この米山先生のリーダーシップによって始まった日本のロータリークラブは、どのような発展を遂げたのか、その現象の歴史を少し振り返ってみますと、大正９年１０月２０日ダラスロータリークラブをスポンサークラブとして東京ロータリークラブが創立されました。これが日本の第１の本家クラブであります。

次いで、大正１１年１１月１７日、今度はＲＩの直轄によって大阪ロータリークラブが創立されました。これが日本の第２の本家クラブであります。

この東京クラブと大阪クラブという二つの本家クラブを基軸として、それぞれが子クラブを生むという形で日本ロータリーの拡大が始まり、その後昭和１５年までの２０年間に４８クラブが創立されたのであります。

ところが、昭和初期から始まった軍閥の台頭、そしてロータリーに対する軍閥の弾圧によって日本のロータリークラブ群が右往左往しながら、挙げ句の果てが壊滅状態に追い込まれて遂に解散してしまったのであります。時に、昭和１５年９月のことでありました。これが戦前の日本ロータリー拡大の系譜であります。

解散当時のクラブ数は４８クラブ、ロータリアン数２１４２名、今日のロータリーから見ると、１地区にも満たない真にささやかなロータリーでありましたが、皆粒選りのロータリアンの集団でありました。このようにして、戦前の日本のロータリーは、思想的にも、理論的にも、そして実践的にも素晴らしいものを創り上げて居たのであります。

殊に、アメリカで生まれたロータリーを日本的にアレンジして日本の社会に馴染み易いものにしようというロータリーの日本化の問題については、例えば、大連クラブの古沢丈作氏が１９１５年の職業倫理訓１１箇条を日本的にアレンジしてこれを５箇条の日本文に翻訳し、これを昭和３年の大連クラブのロータリー宣言として発表しました。そして、これが翌年、昭和４年の日本最初の地区大会において米山ガバナーによって紹介され、古沢さんこそロータリアンの鏡であると激賞されたことは有名であり、これが戦前の職業奉仕のバックボーンとなっていたことは紛れのない事実なのであります。

更に、大阪ロータリークラブの土屋大夢氏による二宮尊徳翁の報徳教の思想の紹介等によって、日本ロータリーの職業奉仕の精神伝統が築き上げられたこともまた歴史

上顕著な事実であります。

このような戦前における職業奉仕論の展開は、アメリカ本流の職業奉仕の考え方を日本ロータリーに同化させようとした一つの現象の問題ではありましたが、その根底に流れる思想は、将に職業奉仕の中核を掴んだ本質的なものであったのであります。

そこで次に、職業奉仕の根本原理は一体何か、ということを検討しておきたいのであります。先ず、若干のイントロダクション的な話として、先ほど、俳句を引用しながら申し述べましたように、職業奉仕についても現象と本質の二つの側面から見ていきたいと思うのであります。

実は、ここ僅か５０年ばかりのロータリーの歴史を顧みましても、ロータリーは随分と変貌してしまったと思います。

先ず、「一業一会員制の原則」所謂「職業分類の原則」は、２００１年の規定審議会の決議によって廃止され、規則的例会出席の原則は、職業奉仕の基本前提になっている原則なのでありますが、１９６８年以降、規定審議会の決議による度重なる規制緩和によって全く有名無実になってしまいました。

また、ロータリアンの個人倫理の核であった１９１５年の「ロータリー道徳律」は、１９８０年の規定審議会で廃止され、実践原理の核「決議２３－３４号」は、今後は手続要覧に歴史的文書としてのみ保存されることになってしまいました。このように現象としてのロータリーは、２０世紀初頭に形成された素晴らしい原理・原則の殆ど全てを失ってしまったと謂えるのであります。

これをロータリーの変貌と見るか、或いは衰退と見るかは、人それぞれ見方の分かれるところでありましょうが、それもロータリーであります。現象としては色々あってよいのであります。それが将にロータリーであります。

しかし、大事なことは、ロータリーは本来如何にあるべきか、というロータリーの本質・核を見失うと、それはもはやロータリーではなくなるのであります。

このように、ロータリーは、目に見える現象としては将に大きく変貌しました。しかし、目に見えない本質の問題即ち、ロータリーの核にあるものは些かなりとも変わってはならないのであります。

謂わば、目に見える現象としてのロータリーは、外なるロータリー、これに対して、目に見えない本質としてのロータリーは、内なるロータリーであります。

そこで、次に、ロータリーにとって一番大事な内なるロータリーの世界に重点を置きながら、外なるロータリーの世界を眺めてみたいのであります。

さて、１９０５年当時のロータリアンは、皆がお互いに仲良くなる親睦ということしか考えていませんでした。しかし、親睦活動をしながら次第に豊かになって行ったのであります。

そして翌年、Donald Carter の『世のため人のためのことも考えるべし』と謂う刺激を受けて、『我らの親睦のエネルギーを世のため人のために』という奉仕の概念を考え出すに至るのであります。ここに一つの思想の芽生えがあったと謂えるのであります。

ただ、この親睦と奉仕という二つの考え方で纏めたときに、ロータリー運動の初期の段階で、ポール・ハリスが犯した最大の過ちは、親睦と奉仕というものを価値の世界で上下の関係において捉えて、しかも奉仕を親睦に優先させたことでありました。それは一体何故か。

彼の考え方は、「始めに親睦ありき」その後で奉仕という考え方が出てきたが、奉仕

の方が親睦よりも次元の高い概念であるとして、奉仕を親睦より優先させたのであります。その結果どうなったか。

当初、親睦だけを楽しんでいたクラブの中に、世のため人のための奉仕という全く異質なものを持ち込み、しかも、その奉仕ということを最優先課題としたものでありますから、当然のことながらシカゴクラブは物凄く荒れました。そして遂にクラブは親睦派と奉仕派に割れて、クラブ崩壊の危機に瀕したのであります。

そして、この葛藤の中から１９０８年、多数派の親睦派が少数派の奉仕派を追い出すという大変厳しい事態となってしまったのであります。

そこで、ポール・ハリスは痛く反省しまして、『ロータリーは、親睦と奉仕の調和の中に宿る』と悟りました。そして、親睦と奉仕とを等位の概念として捉える考え方を提唱するようになったのであります。

では、親睦と奉仕とを一体どのようにして調和させるのか。

ポール・ハリスは、ロータリーは親睦と奉仕との調和であるという立場から、『ロータリーの本質は、寛容の中にある。寛容な態度をもって皆がお互いに仲良くしながら、その仲良くするエネルギーが世のため人のために使われる』という図式を開発したのは大変見事なことであったと言わなければならないのであります。これがポール・ハリスのロータリー理論「ロータリー寛容論」であります。

この寛容論につきましたは、上野ガバナーが今月のガバナー月信第８号の巻頭言において、アーノルド・トインビーの見解を引用しながら、大乗仏教の根本思想からロータリー寛容論を説いておられるのは傾聴に値するものであります。

ところで、『我らの親睦のエネルギーを世のため人のために』ということは、言うことは易しいが、これを原理的に理解するのはかなり難しいものであります。と申しますのは、親睦というのは、ロータリアン同士がクラブの中でお互いに心と心を温めることでありますが、これに対して、奉仕というのは、ロータリアンがクラブの外に向けてロータリアン以外の人達のことを考えることだからであります。

このように、エネルギーの方向が全く正反対でありますから、『我らの親睦のエネルギーを世のため人のために』ということは、一体どのように理解すればよいのか、これはかなり難しい課題であったと謂えるのであります。

そこで初期のロータリアンは、１９０７年時点においては何らの先例もなかったので、何もないところから考えて行かなければなりませんでした。

そこで先ず、最も素朴な考え方を採りますと、親睦は親睦、奉仕は奉仕と考えます。

したがって、親睦というのは、ロータリアンが物心両面の助け合いをすることであり、具体的には、会員は親類付き合いをするのだから利益を貪ってはならないというのでお互いに原価で取引をしたり、お互いの職業を地域社会の人に宣伝し合ったのであります。また、会員相互の企業経営上の悩みや問題点について智慧を出し合ったのであります。所謂アイディアの交換、発想の交換であります。このようにして、親睦活動の結果、皆が豊かになればその所得の一部を世の中の恵まれない人達に提供すること、これが奉仕であると考えたのであります。

勿論、世の中の恵まれない人達を救済することは国または地方自治体の役目である

という建前にはなっていますが、これには公共財源の限界がありますので、国が全ての人を救済することは出来ません。そこでロータリアンが豊かになった自分の所得の一部を提供することによって、その人達が喜ぶならば、これが世のため人のための奉仕をしたということになるのであります。

実は、初期の素朴で善意なロータリアン達は、皆この路線を採ったのであります。

即ち、ロータリーの親睦は、ロータリアンがお互いに助け合って豊かになること、即ち、金持ちになるための作業である。そして、金持ちになった以上は、その金を恵まれない人達のために使おうという考え方であります。したがって、この考え方では、親睦のために結集するエネルギーと世のため人のために考えるエネルギーとは、その基盤が全く異なるのであります。

シカゴの初期のロータリアン達の作業の中には、このような種類のものがあって色々な活動をしているのであります。

例えば、新聞売り子の少年を助けたり、馬を死なせて宣教活動が出来なくなった牧師にクラブで金を集めて助けるとかして、個人奉仕的なものもあり、団体奉仕的なものもあったのであります。

要するに、親睦に集まる時には金儲けのことを！奉仕をするときには儲けた金を世のため人のために！という考え方であります。したがって、ここからは当然のことながら職業奉仕というものが生まれる余地はないのであります。

そこでロータリーは、金を恵むことだけがロータリーの奉仕なのかという反省から、１９０８年以降、ロータリー的な奉仕概念を開発するに及んでこの考え方、即ち、儲けた金で奉仕するという考え方を捨ててしまったのであります。では、それは具体的には一体どういうことなのか。

ロータリーは、親睦のために考えるエネルギーと世のため人のための奉仕のために考えるエネルギーとは、向かって居る方向は逆であるがその行動を起こす基になる心は一つの心、即ち、親睦の心は同時に奉仕の心であると考えるに至ったのであります。

これは将に、この話の冒頭に原始親睦について申し上げたこと、即ち、親睦と奉仕は本来一体のものであるという考え方であります。したがって、ロータリーは、このような考え方を採るに及んで、奉仕哲学の世界を開拓せざるを得なくなったのであります。

何故、このような大袈裟なことを謂うのか、と申しますと、実は、ロータリー以外の奉仕クラブは全てロータリーの考え方ではないからであります。

例えば、Exchange Club , Kiwanis Club , Lions Club, Y's mens Club などは全てロータリーの考え方ではありません。

ロータリーだけが初めて親睦イコール奉仕、即ち、一つの心をもって親睦を行い、同じ心を持って奉仕をする、という考え方を開発したのであります。

この考え方を採るからこそ、親睦の内容を発想の交換・精神的相互扶助というような精神的なものとして捉えることが出来るのであります。したがって、親睦と奉仕とが一元となり、ここから職業奉仕の概念が出てくるのであります。

したがって、親睦の本質を感性的な次元において捉えますと、それは、ロータリーの親睦とは似て非なるものとなってしまいます。例えば、酒を飲んだり、ゴルフをしたりすることは、親睦活動であって親睦そのものではありません。このような楽しいことを感性的な次元においてのみ捉えます

と、それはロータリーの本来の親睦とは離れてしまいます。

確かに、ロータリーは親睦から始まったのでありますから、そのような感性的な親睦も大事であります。しかし、このような親睦は、ロータリーでなくても、地域社会の人達にもあります。極端なことを謂えば、暴力団でもそれがグループ活動である以上、感性的な親睦はあります。彼らもロータリアンと同じように、酒を飲み、ゴルフをしています。では、暴力団の親睦とロータリーの親睦とは、一体何処が違うのか。この点を煮詰めておかなければなりません。

実は、ロータリークラブは、社交クラブでありますから、酒を飲んでも、ゴルフをしても、楽しいことは何をしてもよいが、ただ一点忘れてはならないことは、何をするにつけても相手から何某かのものを学んで自分を高めようという精神面の開発の問題を頭の中に入れておかなければならないのであります。即ち、「心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る」これがロータリー思想の中核にある考え方なのであります。

このような精神的な親睦を前提にして親睦論を確立したところに、ロータリーにおける親睦と奉仕の調和の考え方があるのであります。

要するに、倫理的に許される感性的な喜びであれば、何をやってもよろしい。酒を飲んでもよろしい。ゴルフをしてもよろしい。しかし、何をするにつけても、自分を磨く、自分を高めるという精神的な要素を忘れてはならないのであります。

これがロータリーの親睦論の中核にある考え方であります。そして、このような立場をとるからこそ、職業奉仕論が出てくるのであります。

このように、親睦を『精神的親睦』の形で把握出来ないと、職業生活をマネージしている心の根底において、奉仕ということを把握することが出来ないのであります。

したがってまた、職業奉仕をOccupational serviceと謂わずに、敢えてVocational serviceと謂いますが、その意味は、自分の職業は、ただ単に金を儲けるためのものではなく、神様の思し召しによってこの職業を授かったのである。したがって、自分は物を商ってはいるが、商っていること自体、これは神様に対して商って居るのだという自覚を持ちますと、これ即ち、『職業をもって奉仕と考える』という考え方になるわけであります。

したがって、『あらゆる職業に聖職者意識を』という考え方を頭に入れて、初めて職業奉仕の概念が正当化されるのであります。

これ以外の立場を採りますと、職業は、単に『私的利潤追及の行為である』とか『金儲けの手段である』という形になって来ます。これは、職業をもって世のため人のための奉仕と考えるという考え方とは、全く次元の異なるものとなるのであります。

このようにして、ロータリーの職業奉仕論というものは、他の一切の奉仕クラブの中に定着していないのであります。即ち、職業奉仕はロータリーにしかないのであります。このことから誰言うとなく感覚的に唱えられ出した言葉が『ロータリーのロータリーたる所以は、職業奉仕の実践にあり』という言葉でありました。つまり、他の奉仕クラブでは、職業奉仕の概念を確立できないのであります。確立出来ない根本の原因は一体何処にあるのか、というと、今申し述べたように、親睦の本質を如何に理解するか、という一点にあるのであります。

実は、私が最初に親睦の話から入って行っ

た意味はここにあったのであります。

要するに、親睦というものを精神的なものとして捉える、言い方を換えますと、ロータリーは当初、感性的な親睦から始まりましたが、やがて奉仕を考えるようになって精神的な親睦に昇華していったのであります。即ち、ロータリーは親睦に始まり親睦に終わるのであります。

さて、そこで、今日のテーマである「職業奉仕の原点」とは一体何時か。

ロータリーの世界に職業奉仕という概念が現れたのは、１９２７年、ＲＩ理事会がロータリーの奉仕をクラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕そして国際奉仕という四つに類型化した時であります。

しかし、職業奉仕という原理の実体は、既にそれより２０年前の１９０７年、Arthur Frederic Sheldon がロータリーの奉仕概念を確立した時に既に存在していました。即ち、当時、職業奉仕という原理の実体は既にありましたが、その原理を職業奉仕とは呼ばなかっただけのことであります。

恰も、夏目漱石の小説「我が輩は猫である」の冒頭の一節「我が輩は猫である。名前はまだない」という状態、即ち、猫は既に実在するが名前は未だ付けられていないという状態であります。したがって、職業奉仕という言葉が現れたのは確かに１９２７年ではありますが、職業奉仕という原理が生まれたのは１９０７年，Arthur Frederic Sheldon が「親睦のための一業一会員制の原則」を「奉仕のための一業一会員制の原則」に理論構成したときであります。そして、これによって「規則的例会出席の原則」も単に親睦のためのものから奉仕を目的とするものになったのであります。

したがって、この二つの基本原則は、職業奉仕実践の基本前提なのであります。したがって、「職業奉仕の原点」を語るには、先ずこの二つの基本原則から検証しなければなりません。

そこで、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則が職業奉仕実践の基本前提であるということは、具体的には一体どういうことなのか。

先ず、１９０５年、創世記のロータリーには、世のため人のための奉仕などという考え方は影も形もありませんでした。そこには、クラブ会員が皆で仲良くして助け合う「親睦だけの世界」がありました。

この助け合うということの具体的な意味は何か、と申しますと、ロータリアンは、皆、職業人でありますから、自分の企業経営上の悩みをクラブに持ち寄って智慧を出し合ったのであります。「うちの会社では今こういうことで悩んでいるんだ。何かいい考えはないかな」と言いますと、当時は一業一会員制でありますから会員は皆それぞれの所属する業界が違います。したがって、それぞれの業界の発想もまた違います。

そこで、「そのことならうちの業界ではもう解決済みだ。こうして御覧」と言って教えてくれます。「有り難う」といって早速そのアイディア（ノウハウ）を企業経営に役立てます。

また、或る問題については、皆未だ未解決であった場合には、三人寄れば文珠の知恵と謂いますから、皆で衆知を集めて解決して行ったのであります。

このようにして皆が智慧を出し合い、アイディアを交換して、助け合ったのであります。したがって、当時は、恰もクラブが経営相談所のような機能を果たすようになり、会員達は次第に豊かになって行ったのであります。

そして、この「発想の交換機能」

Exchange of Ideaの機能によって、やがてロータリーは、１９２７年、職業奉仕という類い希なる概念を生み出すに至ったのであります。

このクラブ例会における「アイディアの交換機能」「発想の交換機能」こそ、ロータリークラブが創立当初からもっていた「本質的な機能」なのでありまして、このことは当時のクラブの定款にも「発想の交換」Exchange of Ideaという言葉が記されていたのであります。

ところが、何時しか、この発想の交換という言葉が定款から消えてしまったのであります。それは一体何故か。というとクラブ例会における「発想の交換」Exchange of Ideaと謂うことは、ロータリークラブにあっては至極当然のことではないか、当たり前のことであれば、わざわざ書いておく必要はないだろう、と謂うので、消してしまったのであります。

したがって、言葉は無くなりましたが、現在も「発想の交換」Exchange of Ideaという機能は、ロータリークラブの「本質的要素」として厳然として存在するのであります。

我が国でも、昔、私が入会した頃のクラブには未だこの発想交換機能が残っていました。私は、或る学校法人の理事長として団体交渉のノウハウを実業家の先輩によく教えられたものであります。

しかし、今のクラブには、私の知る限りこのような発想交換の情景は全く見受けられないようであります。したがって、今の日本のロータリアンがこの発想の交換による例会出席の重要性をどれほど認識しているかについては、疑問なしとしないのであります。

しかし、一方、今、日本のクラブの中には、例えば、御当地第２５８０地区のように、職業奉仕の原理認識を高めよう、職業奉仕の実践によって素晴らしいロータリーを実現しようとする意欲に燃えているクラブが沢山あります。

翻って、２０世紀初頭のロータリアン達はどうであったか。彼らは、例会出席の重要性を強く認識して、自己研鑽・切磋琢磨による企業経営上のアイディアの交換・発想の交換をしていたのであります。

そして、その発想の交換機能の中からロータリー的企業管理論とでもいうべき原理を開発し、その原理を実践しました。そして１９２７年、遂にその実践原理を職業奉仕と名付けたのであります。

そして、その２年後の１９２９年、アメリカ経済社会を襲った空前絶後の大パニックの時にロータリアンは一人も倒産しなかったのであります。

これは、クラブ例会における発想の交換機能によって職業奉仕の原理を開発し、それを自らの企業に実践していった功徳だと言われているのであります。だからこそ、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則が職業奉仕実践の基本前提なのであり、職業奉仕の実践は、先ず例会出席から始まるのであります。

これは、職業奉仕の重要な柱であり、ロータリーが倫理運動であることの面目躍如たる場面なのであります。この故に『ロータリーは、人類文化史が２０世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動である』と謂われているのであります。したがって、職業人の倫理運動であるというこの考え方が正にロータリーの核にある考え方なのであります。したがって、この点が解らないと職業奉仕が解らなくなるのであります。

実は、この「ロータリーの核」にある考え方を文章として明確に表現しているものが標準クラブ定款第４条の「ロータリーの綱領」なのであります。したがって、“綱領を知らずしてロータリーを語ることなかれ”と言われているように、綱領を身につけることはロータリアンであることの絶対条件なのであります。

ロータリーの綱領は、ロータリーの般若心経ともいうべきものでありますから、ロータリアンとしては、大悟徹底的に理解していなければならない問題なのであります。ところが、最近は、綱領を知らないロータリアンが増えてきたということを時々耳にします。これは誠に由々しきことであります。

昔は、このようなことは絶対にあり得なかったのであります。クラブとしては、クラブ自治権を確立するためにも、新会員を迎え入れる時には綱領の解説を徹底するべきであります。綱領が理解できなければ、ロータリーが倫理運動であることが理解出来ません。したがってまた、職業奉仕も理解できないのであります。

ところで、職業奉仕という言葉は、ロータリーの専門用語であります。ライオンズクラブには職業奉仕という概念はありません。キワニスクラブやオプティミストその他ロータリー以外のアメリカ系奉仕クラブにも職業奉仕という言葉はありません。

更に、一般世間の人達も、職業奉仕という言葉は使っていません。辞書を引いても職業奉仕という言葉は見当たりません。正に、職業奉仕という言葉は、ロータリーの専門用語なのであります。考えてみれば、これは奇妙な言葉であります。

元来、職業というものは、私達が生きて行くための所得を得るための手段、即ち、金儲けの手段でありますから、これは自分のためのものであります。

一方、奉仕というものは、世のため人のために何かをすること、即ち、自分以外の人のためのものであります。このようにエネルギーの方向が全く正反対の二つの言葉を一つに合体させて、職業奉仕と言っているのでありますから、判りにくいのも無理はないのかも知れません。

一体、自分のためのものである職業が、人のためのものである奉仕のテーマになり得るのでありましょうか？

職業を営むこと、即ち、金を儲けることが、何故、世のため人のための奉仕となるのか？職業即ち金儲け、これを奉仕と考えるためには、一体如何なる考え方が必要なのか？この一点が判らないと、職業奉仕は永久に判らないことになります。これを論証していくのが、将に今日の課題であろうかと思うのであります。まず、世のため人のための『奉仕』についての最も素朴な考え方については、先ほど申し述べたところでありますが、大事なところなので重ねて申し上げます。即ち、職業は、所得獲得の手段、即ち、金儲けの手段であります。それは、あくまでも自分のためのものであって、そこには、世のため人のためという他人のための考え方は一切入る余地はありません。したがって、職業は奉仕になりません。

職業と奉仕とは、それぞれ別の世界に存在すると考えることになります。

この考え方からすれば、職業を営むことが同時に奉仕になるとは考えられないのでありますから、世のため人のために『奉仕』をしようとすれば、職業以外の方法によらざるを得ません。

例えば、職業によって得た所得の一部を恵まれない人達に与えるとか、自分の労力や時間の一部を割いてボランティアー活動

をするとかして、いわば弱者保護をもって奉仕と考えるわけであります。したがって、職業をもって奉仕と考えることはできないのであります。

勿論、弱者保護については、ロータリーも社会奉仕の範疇においてこれを重視し実践しているのではありますが、この素朴な考え方では、職業という視点から奉仕ということを考えることが出来ないのであります。

要するに、所得を得るために行動する時の心、即ち金儲けの心と、世のため人のために奉仕する時の心とは、全く次元を異にしているわけであります。

ところが、ロータリーは、職業を営む心も奉仕の心も共に同じ一つの心、つまり、金を儲けるために考えるエネルギーと世のため人のために考えるエネルギーとは、その向かっている方向は異なるが、その行動を起こす元になる心は、一つの心だと考えるのであります。即ち、一つの心をもって、職業を営み且つ奉仕すると説くのであります。詰まり、金を儲けること、職業を営むことが同時に世のため人のための奉仕になる、と考えるのであります。

言い換えますと、世のため人のために奉仕をする心をもって職業を営むべし、と説くのであります。したがって、この考え方では、必然的に、職業を営むことに、世のため人のためという倫理性を要求することにならざるを得ないのであります。即ち、砕いて謂えば倫理的な金儲けをする、と謂うことであります。

さて、そこで私達は、倫理の問題を考えるとき、人間の行動パターンを考えてみる必要があります。それは、『打算の世界』と『愛情の世界』に大別出来ます。

(1)『打算の世界』とは、人間が価値を求めて行動する分野であります。

人間は、本来、価値のないものは相手に致しません。例えば、１万円の商品と１万円の貨幣とが交換されるのは、その交換によって売主・買主双方にそれぞれ何らかの利益があると考える時に、この等価交換は成立するのであって、一方が交換によるメリットがないと判断した場合には、この等価交換は成立致しません。このように、打算の世界とは、人間が等価交換の原則の下に常に何らかの価値を求めて、打算によって行動する分野のことであります。

(2)「愛情の世界」とは、貨幣価値などでは計ることの出来ないほど価値のある世界、そこには、打算や等価交換の原則などは一切存在しない、そういうものを一切必要としない世界、例えば夫婦の関係のように「私の物は貴方の物よ、貴方の物は私の物よ」という考え方の支配する世界であります。

そこには、一切の打算がありません。しかし、限りなき愛情があります。この価値は、計り知れないものと言わなければなりません。

ところで、打算の世界では、等価交換が終了するまでは、人と人とが関係づけられていますが、一旦、交換が終了すると、その人間関係は貸し借りなしに精算されてしまいます。例えば、１万円の商品と１万円の貨幣が交換されることによって取引は終了し、売主・買主の間は、一切貸し借りなしに精算されて、後には何も残りません。

ところが、愛情の世界では、例えば、ご主人が今月の手形の決済が出来なくて困っている時に、奥様が実家から貰ってきた５００万円を提供し、例えそれが返して貰えないことになったとしても、それを裁判にかけてまで請求することは絶対にありません。その限りにおいて、精算されないままに因縁が残っています。打算の世界から

見れば、まさに奥様が損をしたことになるのでありますが、それを損とは考えない、

即ち、打算的思考の圏外にある思考であります。そこには、一切の打算がありません。

しかし、限りなき愛情があります。

ところで、私達の職業の中にも、只管この愛情の世界にのみ生きてきた職業があります。例えば、宗教家の世界も愛情の世界であります。

僧侶は、ただ只管に仏の道を説きます。

それは、御布施を求めて仏の道を説くわけではありません。人々に対する限りなき愛情をもって、人々の悩みを救うために、ひたすら仏の道を説くのであります。

その結果、人々が感謝の気持をもって御布施を差し出せば、感謝の気持をもってそれを受けとるのであって、それはあくまでも結果の問題であります。

したがって、人々が貧しくて、御布施を差し出すことが出来なければ、出さなくともよいのであり、それを僧侶の方から請求すべき筋合のものではないのであります。

したがってまた、この関係は精算されないままに、僧侶の生活は、その分だけ社会に対して貸し方になっているのであります。

その故にこそ僧侶は、世の中から尊敬と信頼をもって報いられることになるのであります。

これは何も宗教家に限ったことではありません。中世ヨーロッパにおいて宗教即ち、神学から派生した学問である法学、医学、哲学、教育学皆然りであります。ロータリーは、これらの分野の職業を一括してprofession専門職業と称して、利潤追求を第一義とするbusiness実業と区別しているのであります。

したがって、宗教家をはじめ大学教授、弁護士、医師等は、神様から与えられた客観原理をもって人々を救済することを第一義とする職業であると考えられているわけであります。そして、このような沿革的には中世ヨーロッパにおけるprofession専門職業の原理が、やがて１６世紀における商人階級の擡頭、そして１８世紀の産業資本主義の勃興を経てbusiness実業の社会にも次第に浸透して行ったのであります。

実は、職業奉仕というのは、この愛情の世界の考え方をもって、打算の世界をコントロールして行こうという考え方、即ち愛情をもって職業をコントロールして行こうという考え方であります。これが「職業奉仕の根本原理」であります。

愛情の世界は、人間関係が精算されないで、常に人と人とが或るものによって因縁づけられている世界、色々な出会いがいつまでも尊重されて行く世界であります。そのような関係の中から尊敬と信頼が生まれて来るのであります。そして、実業家の場合には、更に信用が生まれるのであります。

尊敬と信頼そして「信用」があるからこそ実業家は、長期的に安定した経営をすることができるのであり、個々の取引が常に貸し借りなしに精算されていく打算の世界からは、尊敬も信頼も信用も生まれないのであります。世の中の成功した実業家は、必ず、愛情の世界の原理をもって自分の企業をマネージしているのであります。

例えば、先程の１万円の商品の売買の例で謂えば、売主と買主の間に、商品と貨幣の交換という目に見える現象の世界と同時に、感謝と満足の交換という目に見えない本質の世界がなければならない、とロータリーは説くのであります。

要するに、ロータリーは、倫理運動の立場から、愛情の世界に生きる心、即ち世のため人のための心をもって職業を営んでい

ると、その結果として、『信用』という保護膜に包まれて、長期的に安定した利潤を着々と獲得する強靭な体質の企業を作り上げることができると説くのであり、その「原理の総体を職業奉仕」と呼んでいるのであります。

さてそこで、この職業奉仕の根本原理を如何にして実践するのかという心構えについて一言申し述べます。それは一言で謂えば、職業奉仕とは、職業を倫理的に営むべし、倫理的な商売を営むべし、ということであり、それを実践すれば、自ずから職業は栄えていくとロータリーは説くのであります。

では具体的には、一体どのようにすれば職業を倫理的に営むことになるのか。「職業を倫理的に営む」というは、言い方を換えれば、ロータリアンが全ての生活関係において、自分の行動に愛を込める、ということであります。このことについては、前回の地区大会でもお話致しましたが、重ねて紹介しておきます。

実は、明後日の２月２６日は、あの有名な２．２６事件の起きた日であります。昭和１１年２月２６日、陸軍の一部の青年将校達が反乱を起こしました。この時、反乱軍に殺された人達の中に、時の教育総監渡辺錠太郎大将がおられました。

渡辺大将には、当時、小学生のお嬢さんがおられましたが、その人が今、ノートルダム清心学園の理事長をしておられる渡辺和子先生であります。

実はこの話は、私がこの３３年間関わっています兵庫の２６８０地区のライラセミナーで渡辺和子先生から伺った話であります。そのエキスだけ要約しますと、

渡辺先生は、外資系の会社でエリートの立場に居られましたが、感ずるところがあって２９歳にしてカソリックの信仰の道に入られました。そして、修道女としてアメリカのボストンに渡られたときの話であります。

暑い夏の或る日、食堂で約１３０人位の夕食のために、皿とナイフとフォークをテーブルにセットする仕事をしておられましたが、その時、先輩のシスターが先生に、『シスター、貴女は、今、何を考えていますか』とお尋ねになりました。先生は、『何も考えていません』とお答えになりました。

すると、その先輩のシスターは、厳しい顔になって『貴女は、時間を無駄にしています』と言いました。先生は自分の耳を疑ったそうであります。『何故？』

するとその先輩は、『おなじくお皿とナイフとフォークを並べるのであれば、やがてその席にお座りになる人のために、何故、心の中で「お幸せに！」と祈りながら並べないのですか。何も考えないで、ただ漫然とお皿とナイフとフォークを並べるということは、時間を無駄にしています』と諭されたそうであります。

渡辺先生は、『私は、今まで如何に効率的に仕事をするか、ということを教えられてきましたが、時間に愛を込める、仕事に愛を込めるということは、初めて教わりました。時間に愛を込めること、お皿は同じ早さで、同じ姿で並びます。しかし、目に見えない大切なものが込められるか、込められないかによって、世の中は大きく変わるということ、それは一つには、私がお幸せにと祈って置いたお皿で召し上がった方は、必ずお幸せになるという信仰であります。

ただ、それよりも私にとって大切なことは、私が救われたということ、つまり、私にとって、つまらない仕事はなくなったということ、お皿並べというつまらない仕事、雑用だと思っていた仕事が実はそうではない。雑用は、私が仕事を雑にした時に雑用

になるということを教えられました。だから、救われたのは私です。

つまらないと思ってお皿を置く、お幸せにと祈ってお皿を置く。外から見た限りは全く同じに見えます。かかった時間も変わらない。しかし、仕事の量は同じでも、仕事の質が変わっている、ということは、その人自身が変わったということです』と述懐しておられました。

お皿を並べるというつまらない行為に愛を込めるように、自分の仕事に愛を込める。

私達の全ての行動に愛を込めると言うことは、言い換えれば、ロータリーのいう倫理的な生活をする、と謂うことであります。

これは人を育てる基本前提なのであります。

このように、ロータリアンは、企業経営においても心の問題を重視しなければなりません。したがって、渡辺先生の言葉は、ロータリアンの企業経営の基本的な在り方を示していると思うのであります。仕事に愛を込める、時間に愛を込める、そのことなくして倫理的な人間を育てることは出来ないと思うのであります。

渡辺先生は、お皿を並べるという単純な行為に、「幸せを祈るという目に見えない大切なものが籠められるか籠められないかによって、世の中は大きく変わる」と言われました。このことは、私達ロータリアンが職業奉仕の実践についても肝に銘ずべき言葉であろうかと思うのであります。

要するに、私達一人ひとりの心の中に宿るもの、それが大事なのであります。そこで、このことのロータリー的な意味を少し補足しておきます。

ロータリーでは、毎年、国際ロータリーの会長が、自分の個人的な所信の表明として、「ターゲット」を出して来ました。最近は、このターゲットにＲＩ理事会の決議の裏打ちを付けてＲＩの「テーマ」と称しています。

私の大好きなターゲットは、１９６０－６１年度の国際ロータリー会長エド・マクローリン（J.Edd McLaughlin）の“You are ROTARY”というターゲットであります。

即ち、“You are ROTARY”貴方がロータリーですよ。ロータリーというのは、国際ロータリーのことではない、ロータリークラブのことでもない。あなた方、一人ひとりのロータリアンの心の中に宿るもの、それがロータリーなのですよ、と呼びかけているのであります。

実は、これは優れてアメリカ的な発想なのであります。アメリカの法律即ち、英米法的なものの考え方によりますと、国家というものは、政府のことではない、国会のことでもない、あなた方国民一人ひとりの心の中に宿るもの、それが国家なのだと考えるのであります。即ち、英米法の考え方では、国家とは国民の総体・全体であると考えるのであります。

しかし、例え日本国民が１億２千万人集まったとしても、それだけでは烏合の衆に過ぎません。この人間の集団を国家という統一体にするためには、統治権とか主権などという所謂プラスアルファーがなければなりません。

では、このプラスアルファーは一体何処にあるのか、と謂うと、英米法は国民の一人ひとりの心の中に宿る、即ち、一人一人の国民に分属する、と考えるのであります。

日本国憲法の国民主権とか主権在民という思想も、その根底にはこの考え方があるのであります。日本では、明治の先覚者福沢諭吉先生がこの考え方をとっておられました。即ち、『国家とは国民一人一人の心の中にある或る種の政治的実像である』と説かれたのであります。

このように英米法は、国家とは一人ひとりの国民のことだという立場をとるのであります。したがって、一人ひとりの国民が理性の命ずるところに従って自分の徳性を磨けば、その徳性の総和は、必ず国の政治に反映し、国家の徳性も上がって行くと考えるのであります。したがってまた、国家の徳性が上がれば、あの忌まわしい戦争も予防できると考えるのであります。

ロータリーもこれと同じでありまして、マクローリン会長が「ロータリーは、一人ひとりのロータリアンの心の中に宿る」と説いたように、一人ひとりのロータリアンが自分の徳性を磨く、心を磨くことによって、地域社会、国際社会の徳性が磨かれ、社会全体が明るくなるとマクローリン会長は説くのであります。

これは取りも直さず、一人ひとりのロータリアンによる個人奉仕の提唱であります。

私達ロータリアンがお互いに例会で心を磨き、幸せを祈る、ということが、将に「ロータリーの核にある」考え方でありまして、これを職業奉仕的に謂えば、自分の職業に愛を籠めることであり、皆の幸せを祈り合うことなのであります。

そして、世界中の人達がお互いに心を磨き合い、幸せを祈り合う世界、そのような世界になることがロータリーの夢なのであります。

ロータリーの例会で心を磨き心を通わせる、その親睦のエネルギーが、やがて地域社会、国際社会そして世界社会へと拡がっていく。このことが、ＲＩ会長の謂う「地域を育み、大陸をつなぐ」ということになるのであります。

そして、「地域を育み、大陸をつなぐ」という現象の世界の根底にあるものは一体何か。それが将にロータリーの親睦なのであります。先ほど申し上げましたように、ロータリーの親睦は、感性的親睦から精神的親睦へ。このようにして、「ロータリーは親睦に始まり親睦に終わる」のであります。

ご静聴ありがとうございました。

あとがき

「純ちゃんのコーナー」も本年度、PartXを発刊する運びとなりました。伊丹ロータリークラブの会員と、本冊子の読者の方は、１０年の永きにわたり、深川純一先生の幅広い知識と、考え方を吸収出来る機会に恵まれたことになります。

本年度は、①ＳＡＡの果たすべき役割と、運用上のノウハウ、②世界社会奉仕ＷＣＳのあり方や、その具体的活動事例を通じて、ロータリーのあり方を学びました。

近年、ＲＩの唱える活動方針は変質しつつある、と考える会員もいらっしゃるようです。「ロータリーの本質とは何か」について思索を巡らす時、本冊子のシリーズをめくることもヒントになるかもしれません。既刊資料については、当クラブのホームページで、いつでも御覧になることができます。ご参照下さい。

１０年間の永きにわたり、多大なるご尽力を戴いております深川純一先生の御厚意に、改めまして心より御礼申し上げます。また、本冊子発刊に当たりご尽力戴いた、中島勝美前会長、入潮晃暢前幹事をはじめとする会員の皆様、事務局の吉永恵子さんに深く謝意を表します。

２０１１年９月　　伊丹ロータリークラブ　雑誌・ロータリー情報委員会